

# 巻 頭 言

知識レベルを評価するには、採点が容易で客観性のある multiple choice question 形式のものがよく用いられる。科学的事項は、正答か否かがはっきりしている。医療においては正確な医学的知識を十分に持っていることは基本である。そのため、平成 17 年 1 2 月から臨床実習を行う前に医学生が臨床実習を行うのに必要な知識、技能、態度を習得しているかを判定する共用試験が全国的に正式実施され、本学では進級判定に用いることになっている。

しかし、医療では、正確な医学的知識を身につけていることは必須であるが、患者、家族、他の医療者とのコミュニケーションや接する態度が重要である。医療は人が対象であり、十分な知識や技術を持って医療行為を行っていても、患者や家族に正確に病状を説明し、納得してもらえる能力や患者や家族の目線で感じ、考えることが求められている。

したがって、本学においては幅広い教養と倫理観を身につけるようにカリキュラムにおいて工夫されている。「人間科学研究」は医療文化学講座の先生方が協力して、学生が多様性と criticism を培う力を助けたいとの考えで、専門教育の前に開講された科目である。

本年度は 7 名が選択したが、内容は実に多彩で、しかも充実したものとなっている。論文にまとめ上げることは容易なことではない。文献を調べ、客観的な事実を積み上げ、その批判を紹介し、さらに自分の考え方をまとめることは、近い将来すぐに役立つことであり、また自分自身が学んで一層豊かな教養をえることに繋がったものと考えます。来年度からは単位数を上げており、多くの学生が参加して、教育効果が上がれば幸いである。

最後に努力をした学生はもとより、温かいご指導をいただいた先生方に敬意を表します。

平成 18 年 2 月

滋賀医科大学 副学長

馬 場 忠 雄

## 目 次

巻頭言 馬場 忠雄

### 報告論集

- A-6 岩井 輝修 「平和」という難問…………… 1  
— 国連ソマリア平和維持活動の苦闘 —
- A-9 牛場 彩 アガサ・クリスティについて…………… 13  
— スタイルズ荘の怪事件を中心に —
- A-14 大平 泰之 アコースティック楽器からエレキ楽器へ…………… 27  
— エレキギター誕生までの話 —
- B-4 今井 隆行 女 形…………… 35  
— 七代目梅幸と六代目歌右衛門から —
- B-20 関 千寿花 動物園…………… 43
- B-30 橋本 賢吾 携帯文字と携帯文化…………… 57
- B-35 藤原 大悟 未知なる物、Ooparts…………… 67  
— *Voynich Manuscript* —
- 編集後記 (辻 正博、相浦玲子、兼重 勉、平 英美、早島 理)…………… 85

# 「平和」という難問

— 国連ソマリア平和維持活動の苦闘 —

## 目 次

- 第 1 章 この研究のきっかけ
- 第 2 章 ソマリア派遣ミッションまでの国連
  - (1) 90 年代以前—国連紆余曲折—
  - (2) 90 年代以降—ガリ事務総長—
- 第 3 章 他の平和維持活動との比較
- 第 4 章 ソマリア派遣ミッションについて
- 第 5 章 問題点
- 第 6 章 総括

## 第1章 この研究のきっかけ

2001年9月11日、アメリカ同時多発テロが起こった。21世紀になっても戦争・紛争・テロなどは終わりそうにない。人はみな平和を願っているのになぜ平和にならないのか？このことについて私はもともと興味を持っていたので、人間科学研究の授業を通じて調べてみようと思った。

平和の定義は非常に難しく、『広辞苑』によると「戦争がなくて世が安穏であること」という意味であるが、なかなか客観的評価が難しいものである。歴史ごとに過去の「平和な時代」を調べていて感じたことだが、教科書で同様に「平和」で括られている言葉であっても、それは一定の領域内の範囲のことであつたり、単なる支配のイデオロギーの可能性である場合もあつたりする。そこで私は切り口を変えて現在の平和に対する大きなアクションである国連の平和維持活動に調べてみた。また国連の平和維持活動だけでもテーマが大きいので「失敗した」といわれるソマリア派遣ミッションのみを中心に絞り、他のミッションはソマリア派遣ミッションとの比較だけにとどめる。理由は比較的資料が揃っていること、最初の動機に近い事が挙げられる。加えて、ソマリアの危機的状況ために善意で立ち上がったにもかかわらず、平和維持活動が挫折したことは「平和を皆望んでいるのに達成できないという矛盾」の手がかりになりそうに思われたからである。

ソマリア派遣ミッションについては失敗だったのかそして何が失敗の要因かを調べ、主には国連関係の文献を用いようと考えている。そこから「世界平和」についてなにか獲るものがあればと思う。

## 第2章 ソマリア派遣ミッションまでの国連

### (1) 90年代以前—国連紆余曲折—

第一次世界大戦後、初の世界大戦などを経験して米大統領ウィルソンは国際平和機構として国際連盟を提唱した。しかし、国際連盟は安全保障上の欠点、国際的政治状況に翻弄されたこと、矛盾した思想などのもろもろの脆さのために第二次世界大戦を防げなかった。

第二次世界大戦の末期、連合国の指導者達は国際秩序について討議し、国際連盟に代わる国際機構としての国際連合を成立させた。連盟の安全保障上の欠点①軍事制裁ができない、②アメリカ・ソ連の大国の不参加、③決定方法は全会一致などを修正され、国際連合は発足した。そして武力制裁も可能な五カ国の常任理事国と十カ国の非常任理事国からなる安全保障理事会が設立された。これはミュンヘン会談<sup>(1)</sup>などのファシズムの台頭を防げなかった反省が色濃く出ており、常任理事国の拒否権というリミッター付での武力制裁容認はその反映だと思われる。しかし、冷戦中の米ソ対立による拒否権発動は安全保障理事会の機能を麻痺させてしまい、更なる紛争を防ぐことはできなかった。いや拒否権連発がなくとも大国同士は協調無くしては戦争を防ぐことはできまい。

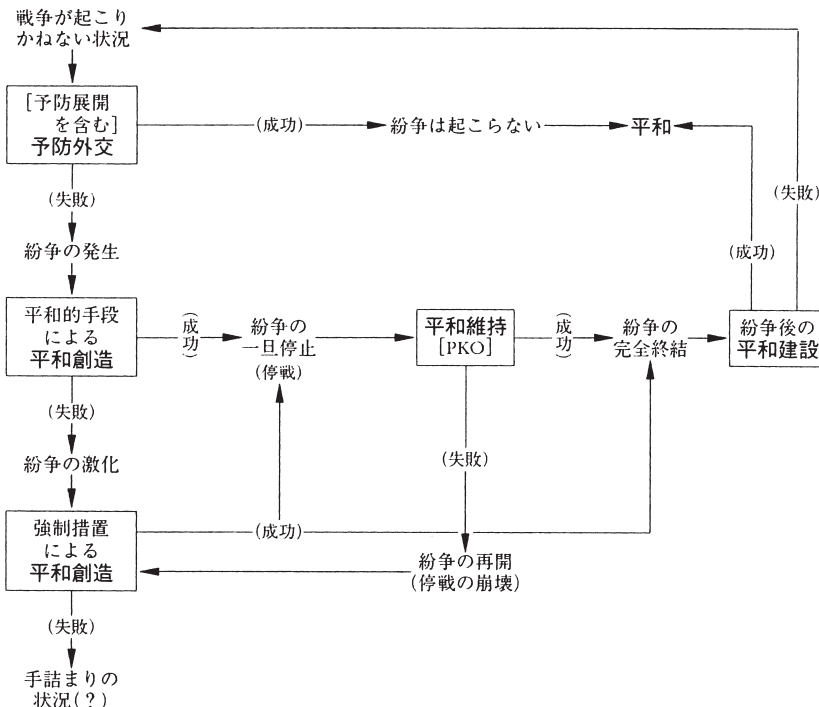
朝鮮戦争、サンフランシスコ平和条約、キューバ危機、そして常任理事国の入替わり（中国）等、国際情勢は紆余曲折を経て、ソ連ゴルバチョフ書記長のペレストロイカの結果として、東西冷戦が終結する。冷戦以後は国際協調のひとつの枠組みとして国連が見直され、安

復活する（始動と言った方がいいかもしれない）。湾岸戦争では国連軍が整備されていなかった為、アメリカ軍を中心とする多国籍軍が編成された。

## 2) 90年代以降—ガリ事務総長—

湾岸戦争の後、国連の集団安全保障が機能するのではないかという期待が寄せられた。92年安保理サミットの要請を受けてブトロス・ブロドス＝ガリ（以下ガリと呼ぶ）事務総長が国連の平和機能強化に関する報告書「平和への課題」を提出した。「平和への課題」はこれからの国連の平和活動はどうあるべきかの方針のようなもので、それまで以上に国連は平和にむけて積極的に動こうという意図の表れである。「平和への課題」のガリ構想は予防外交、平和創造、平和維持（PKO）、紛争後の平和建設、平和強制の五概念からなる。その構造は下記のようなものである<sup>(2)</sup>。「平和への課題」の特徴は、国連は武力紛争の予防からその終結まで紛争の全局面で積極的に役割を果たし、国連の軍事的強制行動の重要視していた。齊藤氏は「国連の集団安全保障を活性化したいというガリの願望が強く伺えた」と述べている。ともあれ国連は「平和への課題」を目標に活動を開始し、おりしもソマリアの危機的状況が明らかになり始めた。

図1 ガリ構想の構造



(『安全保障学入門』より転載)

### 第3章 ソマリア派遣ミッションについて

ソマリアは東アフリカ、「アフリカの角」と呼ばれる地域にある<sup>③</sup>。1991年シアド・バーレの独裁政権が崩壊したことを契機として激しい内戦が勃発した。加えて飢饉も発生し、各地の武装勢力が衝突を繰り返した。

首都モガディシオでは独裁政権を打倒した統一ソマリア会議の内部争いが激化、暫定大統領であるアリ・マハディのグループとアイディド將軍率いるグループの二大勢力の激しい戦争が繰り返されていた。1991年12月、首都を脱出したアリ・マハディ暫定大統領がPKOの派遣を要請した。国民は飢餓状態がすすみ、人道的支援の必要性が叫ばれた。しかし内戦が進むにつれ救援物資略奪やNGOや国連職員の襲撃のために援助も満足に行えなかった。

92年4月安保理決議771で平和維持活動として第一次国連ソマリア活動(UNOSOM I)の設置が決められた。これは二大武装勢力の停戦合意の後を鑑みたものである。UNOSOM Iの主な役割は通常のPKO任務である停戦の監視に加え、人道援助の警護や包括的な平和実現のための政治活動なども含まれた。しかし50人の監視委員と500人の警護部隊では現地の多数の武装勢力を抑えるのは困難であり、警護に必要な紛争当事者の同意も得られず、困窮の度合いは深まるばかりだった。

これに対し国連は92年12月安保理決議774で加盟国からなる兵力からなる部隊の設置が決定された。統合機動部隊(UNITAF)と呼ばれるこの部隊の任務は人道援助物資を運び渡らす為の施設(駅・港)を安全にし、輸送路や物資の警護だった。事務総長は武装解除も任務にしたかったのだがアメリカの主張が通ることになった。UNITAFは初の国連の武力行使であるが、紛争の制裁でなく支援活動のサポートに用いられることになった。アメリカ主体の多国籍軍は圧倒的な兵力であり、武装勢力の抵抗も減った。効果は着実に配給が再開されると餓死者は大幅に減少した。しかし、武装解除には消極的であり、安定は一時的なものであって国連部隊が去ってしまえば内戦が再燃してしまう問題点があった。

93年3月安保理決議814より第二次ソマリア活動(UNOSOM II)が設立された。その任務は人道援助、停戦監視、武装解除、地雷除去、難民帰還など多彩であった。特に二大武装勢力アリ・マハディ派とアイディド派の武装解除を目的としていたが、アイディド派はそれを拒み、UNOSOM IIを挑発。アイディド派と思われるパキスタン兵への襲撃を皮切りにUNOSOM IIの武装解除は米軍とアイディド派の対決へと変貌する。アイディド將軍の逮捕など対決姿勢を明らかにする中、ソマリア人はアイディド派に結束し、国連と米国への敵対感情を深めた。

転機が訪れたのは93年10月3日の武力衝突による米兵の死亡だった(モガディシウの戦闘<sup>④</sup>)。

この事件がアメリカ国内の世論を喚起し、クリントン大統領は完全撤退を表明、諸国もこれに続き、ナイロビで和平会議が行われたものの成果は上がらず、UNOSOM IIは引きあげた。その後外部の介入がなくなった後も戦闘は続き、紆余曲折



の後ユスフ暫定政権がソマリア内の治安回復と施政権獲得の機会を模索している（2005年6月13日）。

この様に意気揚々と始まった国連による安全保障、ガリ事務総長の「平和への課題」方針はソマリア派遣失敗によって変更を余儀なくされる。またソマリアほどあからさまでなかったにせよ同時期に行われたコソボ派遣も成功と呼べるものではなかった。こうして軍事的強制力をもたせた平和活動に国連は暫くの間慎重な態度をとる。

## 第4章 ソマリア派遣ミッションの問題点

私が思うにソマリア派遣ミッションには4つほど問題点が存在する。

- ① なぜ UNOSOM I が治安回復できなかったのか？
- ② なぜアイディド派は国連の武装解除に協力しなかったのか？
- ③ アメリカの派遣時期について
- ④ なぜ撤退せざるをえなかったのか？

ひとつずつ順を追って見てみよう。

- ① なぜ UNOSOM I が治安回復できなかったのか？

やはり人数の少なさが原因ではなかったかと思う。軽武装で 500 人程度ではなかなか抑止力にもならなかったと考えられる。UNITAF に引き継がれた後は米軍 28000 名とその他の軍 10000 名以上の「希望回復作戦」によって被害者に救援物資が届き二ヶ月で一日平均 3000 人の餓死者から 1000 人未満へと状態好転させることができた。このことから、もっと人手がいったのではないかと推測される。

- ② なぜアイディド派は国連の武装解除に協力しなかったのか？

武装解除は UNOSOM II の任務であった。前任の UNITAF はある程度の成果を上げることができたのに対してなぜ UNOSOM II はその任務を遂行できなかったのだろうか？

私は武装解除という任務の難しさにあると考える。アイディド派はアイディド将軍率いる最大のグループであり、武器（武力）を手放すのはデメリットに感じたのではなかろうか。またアイディド将軍は国連撤退後の行動もからもわかるように野心的な人物でもあった。武器は武力であると同時に自分の命を守るための道具でもある。平和の時代と地域に住む私にはわからないほどの有難みがあるのではなかろうか。ソマリアではないが、武装解除において武器を破壊するとき、自分自身で自分の銃を破壊しながら若者は涙をながすそうである。

あるサイトには人数不足が原因だとしていた。確かに UNOSOM II 発足当初は UNITAF の時より少なくなっているようだが、増強もされているようだ。いつの時点でどのぐらい増強されていたのか資料を見つけれなかったので保留しておく。

- ③ UNITAF 派遣の派遣時期について

国連の多国籍軍はどのミッションでも大多数がアメリカ軍である。その多国籍軍の指揮権



も自発的な調整に基づくものであっても、やはり大軍の発言力は非常に大きい。そうでなくとも国際政治でアメリカの存在は大きいのだ。

UNITAF 派遣はアメリカの後押しがあってこそだったのだが、その時期は適切だったのだろうか？ガリ事務総長にブッシュ大統領（父）が米軍主導の派遣部隊（UNITAF）をソマリアに送ることを了承したのは 11 月 25 日、その安保理採択は 12 月 25 日だった。しかし大統領選挙は 11 月 3 日の時点で既にクリントンの勝利と決まっており、湾岸戦争報道の時のように選挙のプラスにはならず、ソマリア派遣を決定しても後の祭りであった。しかもソマリア情勢はその時点でもかなり悪化していた。先行き不透明な状況に関わらず軍隊派遣だけを決定して、その後の処理は次の政権というのはどうかと思う。

#### ④ UNOSOM II はなぜ撤退せざるを得なかったのか？

一言で言ってしまうと最大の派兵国、アメリカの世論が自分達の軍がソマリアにいることに NO と言ったからだ。この結果はアイディド派の武装解除拒否の時点から因果関係の鎖でつながれものであるように思えてならない。

アイディド派の拒否に妥協すればその時点で UNOSOM II の任務は失敗である。だがその時点で撤退すれば米兵の死はなくなったかもしれない。事実は当初の理念に沿いそのまま交渉を続けたようだ。そのため、UNOSOM II の存在を疎んじたアイディド派はプロパンガンダで地域民に国連およびアメリカを敵視させる。そしてパキスタン兵に対する攻撃は UNOSOM II を対アイディド派作戦に没入させるに至る。ベトナム戦争について研究もされていた。モガディシュの戦いでアメリカ兵が亡くなるとアメリカ国民は「なぜソマリア人に対する「人道援助」で行ったはずの兵士が、あまつさえソマリア人に憎まれて殺されるのか？」と不条理を感じ憤激した。この感情をクリントン大統領も無視できるはずがなかった。

わかりやすい原因と結果をつなげただけという感じもするし、上記の説明は財政的な事は何も述べていない。きっと他の要因もあるだろう。ただ上記の説明だけでも「平和」と名がつくものであっても強制介入に困難さを感じるには十分だろう。

## 第 5 章 他の平和維持活動との比較

一般的にソマリア派遣は失敗に終わったといわれている。「任務の達成」を成功と定義するなら確かにかそうかもしれない。だがソマリア派遣ミッションを行った部隊は 3 つありその目的、任務はそれぞれ異なっていたのであるから今回は成功・失敗の原因を部隊ごとにわけて考え、加えて他の 4 つの平和維持活動と比較してみた<sup>5)</sup>。

## <90年代の国連平和維持活動>

	時期	目的(任務)	発端	地域の状況	結果	備考
UNOSOM I (ソマリア派遣)	90年4月～ 93年3月	停戦の監視 人道支援の 警護	飢餓 人道救助 活動の危機	内戦中	失敗	武装勢力の抵抗
UNITAF (ソマリア派遣)	92年12月	支援活動の サポート	UNOSOM I の失敗	内戦中	成功	
UNDOM II (ソマリア派遣)	93年3月～ 95年3月	武装解除など	UNITAF のつづき	内戦中	失敗	中立性の崩れ アメリカ世論
マケドニア派遣	92年12月～ 95年3月	ユーゴ紛争の 飛び火防止	マケドニア 大統領 の要請	隣国は紛争中	成功と される	予防外交
ボスニア ヘルツェゴビナ 派遣	92年4月～ 96年1月	停戦の監視 人道支援の 監督	ボスニアと 新ユーゴスラビア の停戦協定	国家、宗教、民族、 言語が絡み合う 混乱状態	NATOの 空爆まで 悪化	経済制裁の効果 NATOの強制行動
エルサルバドル 派遣	91年7月～ 95年4月	和平協定の 監視	政府軍と 非政府軍の 人権協定の締結	倦戦感があつた	目的は 達成	撤退後の地域発展
ウガンダ ルワンダ派遣	93年6月～ 94年9月	状況悪化に 伴う調停活動	暫定政府成立	少数民族と 多数派民族と軋轢 ジェノサイド	?	国連の財政難 他ミッションの失敗、 判断がわかる是非

マケドニア派遣を除いて停戦を当事者同士守ってもらうことが任務に入っていることにまず注意していただきたい。マケドニア派遣の場合は「紛争予防」といわれるものである。「紛争予防」もガリ事務総長の「平和への課題」のうちの項目のひとつで、紛争がその地域に起こる前に押さえ込んでしまおうというものだ。このマケドニア派遣は国境付近に警備兵を置きほぼ隣国の紛争が飛び火するのを防いだ。国連の中立性の問題が取り沙汰されるが成功とあって差し支えないだろう。

翻って、他の例を見てみるとほとんどが紛争中または停戦中であり、この停戦もよく破られがちである。おおむねこのようなミッションは失敗に終わっており、成功といわれるエルサルバドル内戦もすでに住民に倦戦感があり、交渉を進めやすかったのではないかと推測する。ウガンダ・ルワンダ内戦の特筆すべき点はやはりジェノサイドであろう。ジェノサイドを抑止できなかった国連平和維持活動に非難が浴びせられることもあった。ボスニアヘルツェゴビナ紛争の場合は当事者各々の利害関係複雑であり、「戦争広告代理店」など攪乱要素が存在し、より和平仲裁は困難を極めた。このように国連の仲裁には限界があり、とくにお互いが戦う意志がある時には困難な様である。

## 第6章 総括

以上国連によるソマリア派遣ミッションを見てきた。私はこのミッションの問題点には二つの大きな問題が根底に横たわっていると考ええる。

ひとつは国連のカタチそのものであり、その限界である。国連は世界各国の上に立つ統合組織ではなく、あくまで世界各国の集まり、会議の場のようなものである。私はこのことを調べるまで前者の方に国連を認識していた。当然その「会議の場」では国家間のパワーゲームや思惑が存在する。ソマリア介入についていえば、アメリカという親分が抜けたことでその他の国家の軍が抜けていくのがまさにそれにあたり、国連の意志はあまり反映されない。また自国兵の死に憤慨する国民に対し国連はその説明をすることはできなかった。

二つ目は武装解除の問題である。他の国連派遣ミッションにおいても見たように紛争の雰囲気が残っている中で武装解除は困難のようだ。武器の存在が生命線に思えるのも理解できる。当事者同士にもう武器は必要ない、という認識を持ってもらうのが何よりも重要であるが容易ではない。

調べていて一番印象に残ったのは「なぜソマリア人のために赴いたアメリカ兵が、ソマリア人に殺されなければならないのか」という怒りに答えられないということであった。すくなくともアイディド將軍個人の横暴さだけに還元できなさそうである。国連軍の兵士達はソマリア人道支援の為におもむいたが、ソマリアの人達に「人道」が伝わらなかったのではないかと思う。

そもそも私は「なぜ戦争を皆望んでいないのに、戦争はいつの時代でもおこりつづけるのか？」と疑問が動機であった。今、この疑問を考えてみようと思う。私は、人の平和に対する優先順位が人のその時の状況によって変化するものではないか、と考える。確かに人はだれしも平和を願っているが、それが常に一番だとは限らない。時には、自分、家族、国家、正義、宗教のために平和は二の次になる。極論すれば自分が殺されようが、家族が殺されようが、国が侵略されても、相手が悪でも、人類皆が戦争を望まないのなら「世界平和」は達成されるであろう。家族が殺されるのを黙って見ているのを人間的か、戦争をするのが人間的かという疑問が浮かぶが、そもそも人間的というものも人によって異なる。

ここまで見てくると私は非暴力主義を主張しているようだが異なる、というかそこまで主張できない。ひとつの名前を付けられている考え方や概念でも、それは個人によって異なり、万人が共通するものは現実におけるアクションのみである。「世界平和」を達成するにはまず人が皆平和を第一に考えられるような状況が必須である。20世紀後半の日本や北欧が平和で、先進国の市民が戦争に巻き込まれなかったのはそれが理由であるし、そこに希望の糸があると思う。アメリカにおける同時多発テロは貿易センターだけでなく先進国の安全神話も打ち崩してしまった。少なくとも、大多数の人間が平和を主張するには自分の安全神話が必要である。

こうみると、「世界平和」を不可能にも思えてくる。しかし、国連もソマリア派遣ミッション後も今に至るまで、より良い方法を模索しながら平和活動をしており、なくすことはできなくても戦争の被害者を減らすことに意味があると私は考える。

## 注

- (1) ミュンヘン会談は、1938年9月、ズデーテン地方の問題に関して、イギリスのネヴィル・チェンバレン、フランスのダラディエ、イタリアのベニート・ムッソリーニ、ドイツのアドルフ・ヒトラーが行った会談。戦争によってでもズデーテン地方を併合すると主張したヒトラーに対し、イギリス・フランスは、これ以上の領土要求をしないことをヒトラーに約束させた上で、彼の要求を認めた。イギリス・フランスの宥和政策の典型といわれる。後にドイツはこの約束を破る。
- (2) この章は防衛大学安全保障学研究会編『安全保障学入門』を参考にさせていただいた。
- (3) 地図は、外務省ホームページ各国インデックス（ソマリア共和国）より転載した。
- (4) モガディシュの戦闘とは、UNOSOM II と独立して活動していた米軍特殊部隊がアイディド派と武力衝突した事件である。この時の銃撃戦によりアメリカ軍兵士18人、ソマリア人民兵・市民に350人以上の死者を出し、米軍のヘリ「ブラックホーク」二機も撃墜される。後にリドリー・スコット監督により、『ブラックホーク・ダウン』として映画化された。
- (5) 斎藤直樹『国際機構論』を参考にさせていただいた。

## 参考文献

- 河辺一郎『国連政策』（日本経済評論社、2004年）  
伊勢崎賢治『武装解除』（講談社、2004年）  
斎藤直樹『国際機構論』（北樹出版、2001年）  
防衛大学安全保障学研究会編『安全保障学入門』（亜紀書房、2001年）  
坂口 明『国連、その原点と現実』（新日本出版社、1995年）  
小室直樹・色摩力夫『国民のための戦争と平和の法』（綜合法令、1993年）

## 参考サイト

『安全保障のススメ』

[http://web.sfc.keio.ac.jp/~kenj/security/archives/2005/06/post\\_21.html](http://web.sfc.keio.ac.jp/~kenj/security/archives/2005/06/post_21.html)

『国連の人的介入』

<http://members.jcom.home.ne.jp/romensakura/study5.html>

『外務省外務省ホームページ各国インデックスーソマリア共和国ー』

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/somali/index.htm>

### 【コメント】

「平和」について正面から取り組もうとした岩井君の最初のもくろみは、平和の維持という観点から国連の活動を考察するという形でまとめられました。5ヶ月ほどの限られた時間の中で、よくここまで問題を絞り込めたものだ感心するとともに、歴史の評価が完全に定まったわけでもない現代史を取り上げることの難しさも痛感しました。私たちはこういう大きな問題に対して、ともすれば無力感から目をそむけがちですが、本当はふだんから念頭に置いていなければならないことを、再認識した次第です。

(辻 正博)

アガサ・クリステイについて  
—スタイルズ荘の怪事件を中心に—

## 目次

序章 アガサ・クリスティと私

第1章 クリスティの生涯

- (1) 幼少期
- (2) 青年期
- (3) 壮年期
- (4) 晩年

第2章 クリスティの生きた時代

- (1) 第一次世界大戦とクリスティ
- (2) 「スタイルズ荘の怪事件」とその時代

第3章 クリスティと毒物

- (1) 「スタイルズ荘の怪事件」と毒物
- (2) ストリキニーネについて

まとめ

謝辞

参考文献

## 序章 アガサ・クリスティと私

「アガサ・クリスティと私」というと、なんだかとても大げさな気がする。

しかし、今回の研究の動機となったのは確かに「クリスティと私」の間にかなり親しい関係があったからである。（私からみた、かなり一方的なものではあるが...）小さい頃から母親の影響でミステリーを読むようになり、中でもそのトリック・犯行の動機の面白さで群を抜いていたのがクリスティの作品であった。この人間科学研究のクラスで「アガサ・クリスティについて」やろうと思ったのも、彼女の作品の魅力について自分なりのアプローチをしたかったからだ。

## 第1章 クリスティの生涯

クリスティが遺した数々のミステリー。その中には彼女が成育してきた環境・その過程で感じたことがさりげなく織り込まれ、物語の重要な伏線となっていることが少なくない。以下に彼女の生涯を四期に分けて検討してみたい。

### （1）幼少期

彼女の父親、フレデリック・アルヴァ・ミラーと母親、クララ・ベーマーは義理の従兄妹同士であった。というのも、クララの父親はアーガイル・スコットランド高地連隊の将校であったのだが、落馬が原因で若くして死亡。27歳で未亡人となったクララの母親に、裕福な米国人の後妻となっていた彼女の姉から子どもを養子として引き取りたいという申し出があった。その時、伯母に養子として引き取られていったのがクララなのである。そして、伯母の義理の息子がフレデリックであったのだ。当時、米国に住んでいたフレデリックは英国に来る度にクララに会うこととなる。そして、10年後に二人は結婚することになるのだ。フレデリックとクララの二人は英国西南部の港町トーキーで新生活を始めた。当時、この地は冬期の保養地として有名であり、海が好きだったフレデリックは特に気に入っていた。しかし、長女のマージョリーがここで生まれた時、フレデリックは米国に住む自分の祖父母にマージョリーを会わせる為に米国にむけ、英国をでた。彼は自分を育ててくれた祖父母を大変愛していたので、そのまま米国に永住するつもりであった。けれども、長男のモンタントが生まれると、米国を離れ英国に戻る事となる。そして、次女であるアガサは英国トーキーのトア・モハンで生まれたのだ。アガサの生まれた家はトーキーでも上流家庭の住んでいる地区ではなく、野原のある田舎へ通じる道沿いにあった。この自然に恵まれた環境の中でアガサは様々なことを経験したのであろう。後に彼女が書いた小説にはこの原風景を感じさせる場面が少なくない。

この時代、先祖から代々、財産を受け継いでいる家や、親や肉親から遺産を残された人々は、その受け継いだもので安楽に暮らしていくことが出来ていたので、働くことはしていなかった。アガサの家庭も裕福とはいえないが、それに近い生活をしていただ。父親のフレデリックは毎朝クラブに出掛け、昼食を自宅で取ると、再びクラブに戻りホイストと呼ばれる四人で行うトランプ遊びに興じていた。さらにシーズン中はクリケットクラブの会長としてクリケットもやっていた。このように、自らお金を得る為に行動するという意識も才能も乏しい人物であったようだ。

アガサが生まれた時、既に姉マッジは11歳、兄モンティーは10歳になっており、家



を出て寄宿学校で生活していた。つまり、アガサは三人兄弟の末っ子として生まれながら、ほとんど一人っ子のような状態で幼少期をすごしていたのだ。さらに階級制度が厳然と残っている英国では、両親と子どもが濃密な時間を共有することは少ない。乳幼児はほとんどの時間を“ばあや”と共に過ごすことが普通であった。そのため子どもは成長する過程において、母親ではなく“ばあや”の影響を大きく受ける。アガサもその例外ではない。母親のクララは「子どもは8歳になるまでは字を読ませてはいけない。そうすることが目のためにも頭のためにも良いのだ」（『アガサ・クリスティ自伝』上、p.47）という考えの持ち主であった。けれどもアガサは5歳前には一冊の本を読めるようになっていたのだ。それはなぜか？ここに彼女の“ばあや”が深くかかわっている。“ばあや”は教会には行かないものの家で聖書を読んでいた。幼いアガサは、この“ばあや”から聖書や他の様々な物語を読んでもらううちに、自然に文字を覚えたのだ。このことを“ばあや”から聞いたクララは非常に困ってしまったが、フレデリックは読めるのであれば、書く事、さらに算数も習ったほうが良いと言い出し、自ら毎朝食後にアガサに教えるようになった。

幼いアガサは学校に行かず、さらに一人っ子に近い状態で生活していたためか、ひどく内気で夢みがちであり、また“ばあや”の話す貴族階級に強い憧れを抱いていた。ある日、「大人になったらレディ・アガサになるの」（『アガサ・クリスティ自伝』上、p.84）と無邪気の言うアガサに“ばあや”は現実を教える。「レディ・アガサになるにはレディとして生まれる必要があります。つまり公爵・侯爵、または伯爵の娘でなくてはレディにはなれないのです。確かに、あなたが公爵と結婚すれば公爵夫人にはなれます。しかし、それは生まれながらのレディとは違うものです。」（『アガサ・クリスティ自伝』上、p.84）このときアガサは初めて、世の中には努力してもなれないものがあるということを知ったのである。

アガサが6歳になった頃、父親のフレデリックが心臓病を患い、一家はトーキーの自宅を人に貸し、南仏に半年間滞在する。これは療養のため、というよりは生活のためであった。当時は英国で暮らすよりも、仏国で暮らすほうが経済的であったのだ。この頃アガサに多大な影響を与えた“ばあや”は隠退し、仏語を話す家庭教師がつけられた。帰国後はピアノも習うようになるが、11歳の時、フレデリックは亡くなる。

フレデリックが心臓病で倒れた頃からすでに、彼が受け継いでいた財産は投機を任せていた人物によって大幅に減少していたので、未亡人となったクララは3人の子どもの将来と生活の維持といった経済的な問題に頭を悩ますようになる。既に社交界にデビューしていた姉、マッジはフレデリックの亡くなった翌年、クララの幼なじみの息子と結婚することとなった。このマッジは結婚前から小説を書いており、結婚後10年か15年たってからは舞台劇を書くようになった。彼女の書いた舞台劇は王立劇場で上演されるほどであった。彼女自身もアマチュア俳優として舞台に立ったこともある。このように豊かな才能をもつマッジを認めていたクララはもう一人の娘、アガサにも小説を書くように勧める。

既に8歳の時、姉のマッジはアガサにホームズの物語を手ほどきしてくれおり、それからアガサはルパンなどの探偵小説に夢中になる。「ぜひ探偵小説を書いてみたい」（『アガサ・クリスティ自伝』上、p.392）というアガサにマッジは「あなたには無理。できっこないわ。賭けてもいい」（『アガサ・クリスティ自伝』上、p.392）とまで言っていた。このとき、アガサの頭の中に「いつかは探偵小説を書いてみよう」という想いが芽生えていたのではないだろうか。

このように母の勧めがなくとも、姉であるマッジの活躍は後にアガサを創作活動にむかわ

せる一種の起爆剤となったようである。だが、アガサがその頃考えていたのは幸せな結婚をすることであった。幼い頃から夢みがちであったアガサにとって最高の幸せとは、父と母がそうであったように、死が二人を分かち時までお互いを信頼し、寄り添いあって暮らすこと、であったのだ。

アガサと母が選んだ寄宿学校で、彼女は以前から知人に習っていたピアノに加え、声楽も始めた。これにより、一時は音楽家になろうとまで考えるのだが、プロとしての才能はないと指摘され、諦めることとなる。

## (2) 青年期

22歳で英国航空隊所属のアーチボルト・クリスティと出会い、文字どおり電撃的な恋に落ちたアガサは既にいた婚約者との婚約を解消することとなる。そして1年半後、第一次世界大戦開戦直後の12月、クリスマス休暇中に二人だけで式を挙げ、二人は結婚した。夫となったアーチャーは式の直後、慌ただしく仏国に参戦していった。

アガサは結婚前から、ボランティアの看護隊員として病院に勤務していた。彼女が悪性のインフルエンザにかかり、休んでいる間に病院に薬局が設けられた。復帰してきたアガサはそこに配属され、2年間働くこととなった。そこでは助手として働きながら、軍医や軍所属の薬剤師に調剤ができるよう、薬剤試験の勉強をする必要があった。常に忙しい看護の仕事と違い、調剤の仕事は忙しいばかりではなく、暇なときもあった。薬局を出て行かない限りは、何をやっても自由であった。この時、アガサはいつかの想いを思い出す。「**そうだ。探偵小説を書いてみよう。**」(『アガサ・クリスティ自伝』上、p.470) 一体、自分にどんな探偵小説が書けるのか、思案にふける彼女の周りには薬剤があふれていた。死に至らしめる方法として、毒殺を多用するようになっていくのは必然のことだったのではないだろうか。

26歳で一編の探偵小説を書き上げたアガサは、それをある出版社に送る。しかし、その原稿は返送されてしまう。けれどアガサは諦めず、返送されても違う出版社に何度も原稿を送りつづけていた。だが、夫のアーチャーが休暇をとって帰国してきたことで、原稿のことをすっかり忘れてしまう。戦争は続いていたのだが、アーチャーは空軍省のロンドン配属となり帰国してきた。アーチャーの帰国によって、アガサは4年に及ぶ病院勤務から離れることとなる。

ロンドンで暮らすようになったアガサの生活は一変した。29歳で長女、ロザリンドを出産したことで生活はさらに変化する。この変化の中でアガサが処女原稿について思い出すことはほとんどなかったであろう。だが、事態は急変するのだ。アガサが30歳になった頃、忘れていた処女原稿『スタイルズ荘の怪事件』について出版社から連絡がきた。原稿を出版してくれるというのだ。この時の彼女は一体どんな気持ちであったのだろうか？自分が幼い頃から憧れていた幸せな生活を送っている今、過去に姉の挑戦を受けて書いた原稿が出版されるというのだ。まさに幸せの絶頂だったのではないだろうか。

こうして、ミステリーの女王の処女作『スタイルズ荘の怪事件』は日の目を見、無名の作家の探偵小説としては異例の2000部を売上げた。続いて、『秘密機関』、『ゴルフ場殺人事件』が出版され、いずれも上々の売れ行きであった。

アガサが33歳になった時、夫アーチャーに大英帝国博覧会の宣伝使節の仕事が舞い込む。これを受けたアーチャーと共にアガサは幼い娘、ロザリンドを母に預け、世界一周旅行に旅立つ。南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランド、ハワイ、カナダ、米国...

と諸外国を歴訪し、帰国した時、夫のアーチャーは失職していた。

アーチャーが失職しているため、収入を得るためにアガサは『ミル・ハウスの怪事件』を書き上げる。出版社に持っていったところ連載権として500ポンドが提示された。これは後に『茶色い服の男』と改題して出版されることとなる。やがてアーチャーにも仕事が見つかったので、アガサは田舎の小住宅を手に入れる。トーキーの小さな家で仲睦まじく暮らしていた自身の両親と同じような暮らしを始めるためであった。だが“スタイルズ荘”と名づけたこの家でアーチャーはゴルフに熱中しはじめ、アガサはいわゆるゴルフ未亡人となる。ずっと憧れていた両親と同じような暮らしをするために手に入れた家で、毎日毎日ゴルフにいそしみ、自分のことをほとんど振り返らなくなったアーチャーをアガサはどう思っていたのだろうか。

二人が住むようになった“スタイルズ荘”では過去二代に渡って持ち主が不幸になっていた。その例に漏れず、三代目の住人となったアガサにも不幸が襲いかかったのだ。36歳になっていたアガサは、その年、最愛の母、クララを亡くすと同時に夢に描いていた幸せな家庭をも失うこととなった。アーチャーがゴルフを通じて知り合った女性と恋愛関係となり、アガサに離婚を求めてきたからだ。大きなショックに襲われたアガサは“スタイルズ荘”から姿を消す。既に売れっ子作家になりつつあった彼女の失踪をマスコミは大々的に取り上げた。警察では夫がアガサを殺したのではないかと疑い、大規模な捜索が行われた。

11日後、保養地で発見されたアガサはその11日間のことを全く思い出せなかった。医師は一時的な記憶喪失と診断。一方、マスコミは売名の為の自作自演だと非難した。このことはアガサを一層苦しめ、彼女は大のマスコミ嫌いとなっていた。アガサ本人の書いた自伝にもこの事件は書かれておらず、真相は今も闇の中である。38歳でようやく離婚を受け入れることのできたアガサは娘のロザリンドとの生活を維持するために、次々と作品を生み出していく。

### (3) 壮年期

40歳になってメソポタミアを旅行したアガサは旅の途中、考古学の権威であるウーリー卿の紹介で26歳の若い考古学者、マックス・マローワンと出会う。この頃のアガサは毎年一編の長編を書き、同時に何本かの短編も書けるほどに作家として安定していた。また米国でアガサの作品が連載物となりはじめ、英国よりも莫大な収入を彼女にもたらしていた。やがて親しくなったマックスから求婚されたアガサは、それを受け入れ、極秘に式を挙げる。結婚後もマックスは中東で発掘の仕事を受け、アガサはそれに同行しイラク、シリアを訪れるようになる。この時、利用したりしていた“オリエント急行”から、アガサが44歳の時、代表作の一つといわれる『オリエント急行殺人事件』が生まれる。

49歳の時、第二次世界大戦が勃発。アガサは再び、薬剤師の仕事につくことになる。

53歳の時、自分の死後のことを考え、ポアロ最後の事件『カーテン』、ミス・マーブル最後の事件『スリーピング・マーダー』を完成させる。

### (4) 晩年

62歳になったアガサはメアリ皇太后80歳の誕生日記念に創作したラジオ寸劇(BBC放送で放送された)『三匹の盲目のねずみ』を舞台化。『ねずみとり』と改題されたこの作品は、ロンドンのアンバサダー劇場で初演され、以来、24年間、世界最長のロングラン

興行となる。

アガサが66歳となった1956年、新年恒例の叙勲リストに彼女の名があった。CBE (Commander of British Empire : 三等勲爵士)の称号が与えられたのである。マックスが考古学における業績によりナイト爵位を与えられたのは、アガサが78歳のときであった。78歳にして、彼女は幼い頃、夢見た“レディ・マローワン”となったのである。そして彼女自身も、81歳でナイトに相当するDBE (Dame Commander of British Empire)を与えられる。

ミステリーのみならず、詩作・エッセイなどの様々な創作活動を続けていたアガサであったが1976年、85歳でマックスに見守られつつ、息を引き取った。

互いに信頼し、愛し合っていた両親の姿を理想として成長し、何よりも妻となり、母となり、田舎の小さな家でガーデニングを楽しみながら静かに暮らすのが彼女の夢であった。だが、アガサ自身の作品にも幾度となく登場する“運命”の力により、彼女の人生は自身の夢とはかけ離れたものとなった。けれど、それを彼女自身は後悔していなかったようである。

(注) この章は『アガサ・クリスティ自伝』上、下巻を参考にした。

## 第2章 クリスティの生きた時代

クリスティは二度の世界大戦を経験している。いわゆる激動の時代を生きたのだ。そして、激動の時代であったからこそ、彼女は特殊な職に就くことになる。この職業が彼女のその後の人生に大きな影響を与えたのは、まぎれもない事実である。

### (1) 第一次世界大戦とクリスティ

1913年から1914年にかけて、英国では応急手当や家庭看護法の教室が盛んに開かれていた。参加者たちは互いに手足や頭部に包帯を巻く訓練をし、テキストを用いた講義後、試験に合格すると一週間のうち二日間、地方病院で外来患者の看護に携わることが認められていた。しかし、正規の看護婦ではないため、病院内での扱いは必ずしも良いとは言えないものであった。けれど、アガサは不当な扱いを受けても、看護の仕事に喜びを見出し、病院での仕事のみならず、地区看護師の手伝いもしていた。

1914年、第一次世界大戦が勃発。前述のように、この年に電撃的な恋に落ちた相手アーチボルト・クリスティとアガサは、慌ただしく式を挙げる。夫となったアーチャーが参戦している間、アガサはトーキーの篤志看護隊で看護助手として働いていた。悪性のインフルエンザで一時は休職していたが、復職後は薬局で働いている。当時の赤十字の記録から、アガサはこの時、通算3400時間も勤務していたことが分かる。

後に彼女は自伝で当時のことを振り返って、こう述べている。「私は看護が楽しかった。私は看護の仕事は楽に馴染むことができ、誰でも従事することのできる、報いられることの多い職業だと思ったし、また今でもそう思っている。もし私が結婚しなかったら、戦争

後に病院看護婦となるための訓練を受けていたと思う。祖父の最初の妻、つまり、私にとっての米国人の祖母は、病院看護婦であったので彼女からの遺伝かもしれない。」(『アガサ・クリスティ自伝』上、p.425) アガサの自伝に病院内組織のことが書かれているが、篤志看護師隊所属であったためか、外部からの冷静なまなざしで描いていて興味深い。

「看護の世界に入ったら、世間的な身分・地位による考えを訂正し、新たに病院組織内での自分の位置を正確に把握しなくてはならない。医師は常にその上位に位置している。『はい、看護婦、先生の手をタオル!』私は、ぱっと人間タオルかけになる。しかし医師は手を洗い、その手を拭いたタオルを私には返されない。なんとも横柄に床に投げ出されるタオルを、大人しく拾い上げることを私は間もなく覚えた。看護婦達の間では人並み以下と軽蔑されているこの医師でさえも、一度病室に入ると何やら高等人間にふさわしいような尊敬を受けるのである。医師に向かって直接話し掛けるなどというのは、無礼なことであり、たとえ親しい友人であってもやってはならないことなのであった。

あるとき、医師がいらいらしてこう怒鳴った。『看護婦! 僕が必要なのはそれじゃない!』私の持つ盆の上に、彼が必要とする器具があったので、それを差し出した。すると、後で主任看護婦はこういって私をなじったのだ。『もういい加減に心得ているとばかり思っていたのに。なんてでしゃばりなことをしてくれたの。先生が要求されているものを、たとえあなたが持っていたとしても、直接それを先生に渡してはいけないの。まず、私に渡しなさい。私がそれを先生にお渡しするのだから。』私は、これからそうします、と確約した。このようなこともあったが、時がたつにつれて、次第に責任ある仕事をまかされるようになっていった。医師や看護婦の日頃の手順、暗黙のルールにも慣れた。」(『アガサ・クリスティ自伝』上、p.427)

やがて、アガサはこのやりがいのある看護の職をはなれ、薬局へ配属されることとなる。配属された薬局では単なる助手ではなく、調剤を行うために薬剤師試験を受験することが求められた。しかし勤務時間も看護の仕事よりはずっと楽だったし、自宅での仕事との関係も良かった。だがアガサは後に、こう振り返っている。「調剤の仕事は、一時はおもしろかったが、やがて単調になった。私は看護婦に適した天性を持っていたし、病院看護婦をしていたほうが幸せであった。」(『アガサ・クリスティ自伝』上、p.458)

けれど、この単調な仕事についていたからこそ、後のミステリーの女王は誕生したのだ。アガサを常に取り囲んでいた薬品の瓶たちが、彼女を新しい世界へと導いたのだ。

## (2) 『スタイルズ荘の怪事件』とその時代

「まわりを毒薬で囲まれているのだから、毒殺を選ぶのが私にとって最も自然だろう。毒殺されるのは誰にしようか? その人物を毒殺するのは誰か? いつ、どこで、何のために? その他いろいろと考えなくてはならない。その殺し方の特殊さから、どうしても親密な間柄の殺人にしなくてはなるまい。いうなれば、すべてある家庭内のことにすべきであろう。そして、そこには当然探偵がいなくてはならない。私はそのころシャーロック・ホームズの小説に夢中であつたが、**私の探偵**を生み出さなくてはなるまい。シャーロック・ホームズに私が張り合えるものでもない。どういう人物に

したら良いだろうか？ 学生？ ちょっと難題だ。科学者は？... 一体、私が科学者なるものをどれほど知っているのか。そこで私はベルギーからの亡命者を思い出した。トアの教区に相当な数のベルギーからの亡命者が住んでいたのだ。亡命警察官はどうだろう？ 隠退した警察官だ。あまり若くなく、非常に几帳面で小男。いつも、ものを整理している。非常に頭が良くなくてはなるまい。灰色の小さな脳細胞がなくて... 灰色の小さな脳細胞。これはいい文句だ。」(『アガサ・クリスティ自伝』上、pp.470-474)

物語の構想を練るとき、アガサは常に放心状態になってしまっていた。心配した母のクララが、どうしたのかと尋ねてきたので、アガサは探偵小説を考えていることを打ち明けた。クララは自分の子供たちは何でもできるという信条をもっていたので、こうアガサを励ましたのだ。「それはいい気分転換になるに違いないわ。本当に最後までそれを書くつもりならば、休暇を取ってどこかへ行って書きなさい。」(『アガサ・クリスティ自伝』上、p.476)

この言葉に勇気を得たアガサは二週間の休暇を取り、ダートムアのホテルで物語を完成させたのだ。

こうして生まれた『スタイルズ荘の怪事件』は何社もの出版社から返送される。だがアガサ自身はその存在を忘れかけていた頃、ボドリー・ヘッド社から2年ぶりに原稿の返事がきたのである。出版社の意向を受け、結末部分が改訂され、出版されることとなった。

物語はまさに当時の時代を映している。

第一次世界大戦で負傷したヘイスティングズ大尉が旧友ジョン・カヴェンディッシュの招待を受け、スタイルズ荘という屋敷に向かうところから、この物語は始まる。当時、大きな屋敷には「名称」がつけられており、人々も普段からその「名称」を用いていた。そして、その大きな屋敷には血のつながりのない知人・友人と一緒に暮らしていることも多かった。そのつてを頼って泊まりに来る客もあったようだ。階級制度が厳然と存在しており、家事をする者、庭の手入れをする者、そして使用人を取り仕切る執事が、大きな屋敷には必ずいた。弁護士や医者、今とはかなり違って、家族の友人のように家を訪問し、家族間のことを正確に把握していることが少なくなかった。

シンシアという身寄りのない娘が物語に出てくるのだが、彼女はなんと赤十字病院で薬剤師として働いている設定なのである。まるで、アガサの分身のような存在である。

ポアロの登場の仕方も時代に合っていて、自然である。殺害されるイングルソープ夫人が救済活動や慈善事業に熱心であり、ベルギーからの亡命者の受け入れにも力をいれていた。夫人によって、助けられたベルギー人の一人がポアロの友人であったというのだ。イングルソープ夫人は物語の中で何度も口にする。「今は戦時中ですから。無駄に出来るものなど何一つありません」(『スタイルズ荘の怪事件』 p.20) これはまさに当時の人々が口にしていただことであろう。さらに真夜中に犠牲者となったイングルソープ夫人の部屋に向かう人々が手にしているのは、懐中電灯ではなく、蠟燭なのである。

(注) この章は『アガサ・クリスティ自伝』上巻を参考にした。

### 第3章 クリスティと毒物

クリスティは85歳で亡くなるまでの59年間に渡る執筆活動で、66編の長編、148編の短編を残している。そのうち41編の長編、24編の短編で殺人または自殺の方法として、毒物が用いられている。ミステリーの女王と呼ばれるクリスティが、毒殺の女王という異名を持つ所以である。

#### (1) 『スタイルズ荘の怪事件』と毒物

『スタイルズ荘の怪事件』で犠牲となるのはイングルソープ夫人である。夫人は医者目の前で激しい発作を起し、手当ての甲斐なく死亡する。その発作の激しさから、自然死ではないと考えた医者が死因を分析。致死量のストリキニーネが検出されたのだ。

この物語の核をなす、ストリキニーネ。アガサはこの毒物を物語中に三度登場させている。亡くなったイングルソープ夫人が常用していた強壯剤の成分としてのストリキニーネ、薬屋が“スタイルズ荘の住人”に売った毒物としてのストリキニーネ、シンシアの勤めていた病院の薬局の棚に保管されていた薬剤として合成される前の塩化ストリキニーネ。この三つのストリキニーネを横糸に、複雑な人間関係が縦糸となり壮大な織物が織り上げられていくのである。

アガサの作品の特徴ともいえるのは、その複雑な人間関係が狭い範囲で描かれていることであろう。狭い範囲の人間関係であるからこそ、事件は一見単純に見える。だが、その裏側にひそんでいる事実を丹念に拾い集め、細心の注意をはらい、先入観を持たずに分析すると、事件は全く異なる様相を呈するのである。まるで、薬として人を癒す力を持つものが、その一方で、毒として人を死に至らしめる力を持っているように…。このストリキニーネに関するトリックは、薬局に勤めていたアガサだからこそ思いついたのだろう。物語の中でこういうくだりがある。

「タドミンスターの赤十字病院の薬局で見つけた調剤の書物からの抜粋を読みましょう。

左ノ処方ハ、シバシバ教科書ニ引用サレルモノナリ。

ストリキニーネ・スルファ・・・・・・・・一グレイン  
臭素カリ・・・・・・・・六オンス  
水・・・・・・・・八オンス  
服用時、瓶ヲフリ沈殿物ヲヨク混合セシムルコト。

コノ溶液ハ二、三時間以内ニストリキニーネの大部分ヲ透明結晶状ノ不溶解性臭化物トシテ沈殿セシムル。英国ノ一婦人ハ同混合液ヲ嚥下シテ絶命シタ。沈殿シタ、ストリキニーネハ底ニ集リ、最後ノ一服ヲ服用スル際、ソノホトンド全量ヲ嚥下セシモノナリ！」(『スタイルズ荘の怪事件』 p.268)

これこそがこの事件の真相を握る鍵なのであった。

## (2) ストリキニーネについて

ストリキニーネは興奮薬の一種。ホミカの種子より抽出される植物性アルカロイド。白色の結晶で水溶性。苦味がある。もともとは熱帯地方で矢毒として使用されていた。反射機能亢進、延髄・大脳皮質興奮作用があるため、かつては強心剤、脚気、消化管障害の治療薬として用いられていたが、現在は使用されていない。過量に服用すると、頭を後方へそらせ、手を震わせ、体を弓のように曲げるなどの激しい発作を起し、死に至る。これと同じような発作はヒステリーや破傷風症にも見られる。また、このストリキニーネの中毒症状は動物だけでなく、植物にもみられる。『スタイルズ荘の怪事件』が生み出された当時、ストリキニーネは一般家庭で頻繁に用いられるものではなかったし、毒物であるがゆえに売買には制限がもうけられていた。だが、薬剤の中に成分として含まれていることは少なくなかったようだ。

薬剤の開発に新時代が訪れたのは、19世紀のドイツからである。生薬から純粋な化合物を最初に単離したのはドイツの科学者であったのだ。1803年に粗製アヘンからモルヒネが抽出される。1820年にはキナの樹皮からキニーネが抽出された。モルヒネは強力な鎮痛剤だが、その前段階のアヘン同様、乱用されることとなる。一方、キニーネはマラリアの予防と治療に大きな功績を残している。

(注) この章は『薬』、『アガサ・クリスティ百科事典』、『スタイルズ荘の怪事件』を参考にした。

## まとめ

アガサと私の付き合いは、もう10年以上になる。彼女の作品のほとんどに目を通してははずなのに、今回、改めて読み直してみても印象の変った作品が少なくない。それは、アガサの生涯を追った後に、年代順に作品を読み返したからであろう。幸せな結婚生活に憧れ、一度は手にいれたその幸せを奪われ、それでもまだ夫婦の愛情を信じていたアガサ。彼女は『スタイルズ荘の怪事件』でポアロにこう語らせている。「夫婦の間の愛情は世の中で何よりも大切なものなのです。」(『スタイルズ荘の怪事件』p.288) 一度目の結婚が、夫が愛人を作った末に離婚という結末を迎えた2年後、彼女は再婚する。アガサは、今度こそは、という気持ちだったのではないだろうか。事実、再婚後の1930年代は彼女の執筆活動が最も充実した時期である。

だが、歴史は繰り返される。再婚相手のマックスにも愛人がいたのだ。このことを知ったアガサの哀しみは、苦しみはどれほどだったのだろうか。それでも、彼女は夫婦の愛情を信じていたのだろうか。答えは、イエス、である。彼女は、意識的か無意識かは分からないが自分の作品にそのときどきの自分の気持ちを、さりげなく織り込んでいる。そして、すべてに作品に織り込まれているのは勸善懲悪、キリスト教精神、そして「夫婦の愛情は世の中で何よりも大切なもの」(『スタイルズ荘の怪事件』p.288) だという想いなのである。

アガサの死後ほどなく、マックスは長年の愛人であった女性と再婚する。しかし、再婚後間もなくマックスは亡くなる。マックスの亡骸はアガサの隣に埋葬された。そして、マックスの再婚相手であった女性が亡くなったとき、彼女はアガサとマックスの隣に埋葬し



てほしいとの意向を遺していた。だが、それはアガサ側の遺族の希望により叶うことはなかった。土の下でまでも、夫の愛人と一緒となり、アガサを苦しめられたくないという遺族の想いがあったようだ。どんなに苦しくとも、どんなに哀しくとも、アガサは最期まで夫婦の愛情を信じていたのだから。

ポアロが探偵として整然と事実を積み重ねていく作品であれ、ミス・マープルが揺り椅子で編物をしながら淡々と謎解きをする作品であれ、根底には同じ想いが流れ、全ては『スタイルズ荘の怪事件』のポアロとヘイスティングズ大尉の会話にたどり着く。

「夫婦の間の愛情は世の中でなによりも大切なものなのです」

「あなたのおっしゃることは正しいのでしょうか。そう、世の中でなによりも大切なものですね」(『スタイルズ荘の怪事件』 p.288)。

『スタイルズ荘の怪事件』はアガサの処女作でありながら、トリックやその他の様々な点で、彼女の作品の集大成といえるように、私は思う。

## 謝辞

今回の研究にあたり長期間に渡って、快くクリスティ作品を貸して下さった友人とそのご両親に最大の謝意を贈ります。そして、毎回毎回、私の拙い発表を温かく聞き、鋭い指摘を与えてくださった先生方、ありがとうございました。また、締め切りを遥かに過ぎていても大目に見て、私の論文が仕上がるのを気長に待って下さっていた相浦先生、ご心配をおかけして申し訳ありませんでした。本当にありがとうございました。

最後に、私にアガサという最高の友人を紹介してくれた母に感謝したいと思います。

## 参考文献

- アガサ・クリスティ 乾信一郎訳『アガサ・クリスティ自伝』上下 (早川書房、1995年)  
モニカ・グリペンベルク 岩坂彰訳『アガサ・クリスティ』(講談社選書メチエ 97、1997年)  
ジャレット・ケイド 中村妙子訳『なぜアガサ・クリスティは失踪したのか?』(早川書房、1999年)  
H・R・F・キーティング他『アガサ・クリスティ読本』(早川書房、1990年)  
深町真理子他訳『アガサ・クリスティ生誕100年記念ブック』(早川書房、1990年)  
数藤康雄編『アガサ・クリスティ百科事典』(早川書房、2004年)  
アガサ・クリスティ 田村隆一訳『スタイルズ荘の怪事件』(早川ミステリ文庫、1982年)  
レスリー・アイヴァーセン 廣中直行訳『薬』(岩波書店、2003年)  
マーク・プロトキン 屋代通子訳『メディスン・クエスト 新薬発見のあくなき探究』(築地書館、2002年)  
立木鷹志『毒薬の博物誌』(青弓社、1996年)

### 【コメント】

牛場 彩さんは、アガサ・クリスティーのミステリーの世界をその中で使われる毒物に焦点を当ててみたい、というところから研究を始められました。

素人には 毒物の名前くらい知っていても致死量までは知る由もありません。そのため、なぜクリスティーがそのような薬学の知識をもっていたのかというところに遡る必要が生じ、これまで魅せられていたミステリーの世界から一転して現実の作家の足跡をたどる事になりました。そうして、戦時中、クリスティーが調剤の仕事をしていたことをつきとめます。

また、さらにクリスティー自身がミステリーまがいの失踪をしていたことについてもその背景に彼女の不幸な結婚があることが浮かび上がり、それが作品のところどころにも現れている事を知ります。長年読み込んでこられた作品のようですが、現実とフィクションのはざまから生まれてきた「スタイルズ荘の怪事件」を新たな観点から考察してうまくまとめられました。

今後、他の作品についても別の観点から考察してみられればと願っています。

(相浦玲子)

# 女 形

—七代目梅幸と六代目歌右衛門から—

## 目次

はじめに

第1章 歌舞伎の歴史

第2章 六代目歌右衛門

- (1) 生い立ち
- (2) 芸について
- (3) 女形の捉え方

第3章 七代目梅幸

- (1) 生い立ち
- (2) 芸について
- (3) 女形の捉え方

第4章 二人の役者の違い

- (1) 共通点
- (2) 相違点

第5章 女形の心情

おわりに

参考文献

はじめに

本稿では歌舞伎の女形をとりあげて論じてゆく。なぜ歌舞伎なのかという子供頃に見て不思議だと思ったからである。

子供のころ歌舞伎をみて筆者はとても不思議に思ったことがある。出演者が男性のみであること、男性が女性を演じていることである。ならば、男の人が女性を演じるとき、演じ手はどのような気持ちなのであろうか。ここでは、六代目歌右衛門（1917年～2001年）と、七代目梅幸（1915年～1995年）をとりあげて比較してゆきたい。この二人は最近亡くなった著名な女形である。同時代を生きた二人を比較する事により、女形についてより深い理解が得られると考えるからである。

## 第1章 歌舞伎の歴史

まず簡単に歌舞伎の歴史を振り返ってみようと思う。歌舞伎が誕生した当初から歌右衛門・梅幸が生きた時代までを振り返る。歌舞伎の発祥は戦国時代末期の出雲の阿国である。出雲の阿国は、女性だった。歌舞伎が誕生した時は女性が演じていたのである。その後は、男女と一緒に写実的な劇を行っていた。しかし江戸時代に幕府の令で歌舞伎の変革を余儀なくされた。ここで初めて女形が誕生した。明治になって、政府が歌舞伎に対する干渉を始めた。政府の意図は次の二点。一つ目に「高い身分の方や外国人が見物するようになるから、みだらな男女関係を引き起こす原因となったり、恥ずかしくて親子と一緒に見ることの出来ないような狂言を演じてはいけない。道徳教育の足しになるような狂言を作れ」。二つ目に「芝居というものは本来善を勧め、悪をこらしめる事を趣旨としなければならぬのは当然のことであるが、それに加えて、今後は狂言綺語と呼ばれることを廃止すべきである」。このような干渉の中で、狂言綺語（無いことを装飾して言い表したつくりごと）の対極としての活歴が生まれた。活歴すなわち、事実に沿った歌舞伎が増えるようになった（今尾哲也『歌舞伎の歴史』岩波新書 2000年 p.156）。

## 第2章 六代目歌右衛門

### （1）生い立ち

1917年、五代目歌右衛門の次男として生まれる。幼少の頃から体が弱かった。脱臼して手術で直したが、後遺症がのこり、なにををするにしても不自由であった。女形を志すようになったのは、青年劇に出演してからのことである。青年劇は、昭和七年七月、松竹の専務だった井上伊三郎の企画で誕生した。女形になろうと決めたわけではなく、なんとなく流れに身をゆだねた結果である（河村藤雄『六代目 中村歌右衛門』下巻 小学館 1986年 pp.38～39）。こう書いてあるものの、実際は五代目歌右衛門が女形として大成していたこと、また体が不自由であったことも六代目歌右衛門が女形に進むきっかけになったと思う。そもそも衣装はかなり重く、大きな派手な動きをするには相当の体力が要る。そんな中で立役のような派手な役をするのはなかなかたいへんである。立役とは、すべての男性の役を言う。次男坊であったため、当初福助であった兄が六代目歌右衛門を襲名するはずであったが、その兄が亡くなってしまう。兄が亡くなったことにより十七歳で六代目福助を襲名する事になった。芝翫を襲名し三十四歳で六代目歌右衛門を襲名した。福助や芝翫というのは芸名で、代々受け継がれ、襲名するという形式を取っている。歌右衛門が生きた時代、歌舞伎は常に繁栄をほこっていたわけではない。戦前は、確かに異様な人気であ

った。しかし、戦後はラジオ・テレビの普及によって状況は変わった。娯楽の種類が増えたことにより、歌舞伎の人気は相対的に低下する事になった。こういった歌舞伎界の危機に対して、役者の中には、テレビや映画に出演することで生計を営むものもいた。しかしそれは、立役である。しかし、女形であった歌右衛門は、そういった事はできなかった。公演や旅行のため、海外に行くことが多かったようで色んな所へ行っている。この事は、歌舞伎の世界的普及につながり、そのことによって日本の人気を上げようとしたと思う。2001年に亡くなる。

## (2) 芸について

芸の話をするとき、その個人の考え方もさることながら、その家の家風が重要になってくる。中村家の特徴として、一代から四代までは立役の系統だったのだが、五代目歌右衛門から女形を主にやるようになった。五代目がなぜ女形を本領としたかは分からないが、しいて言うなら「父は福助時代から美貌と気品をうたわれ、(中略)歌舞伎界を代表する名優といわれました。」(河村藤雄『六代目 中村歌右衛門』下巻 小学館 1986年 p.58)というように、女形として成功したためであると思う。幼い頃から父親のもとで修行していくため父親の影響は、特に大きいと思う。六代目歌右衛門の父は、五代目歌右衛門なのだが、この五代目の教え方は一つ一つの動作にこだわるような事はなかった。

「父は何よりも役の性根を厳しく申しました。一人一人体つきが違い、したがって一人ひとりに味というものがあるのだから、まず性根を捉えた上で、自分の持てるものを生かすようにしなければいけない。」(河村藤雄『六代目 中村歌右衛門』下巻 小学館 1986年 p.47)。五代目・六代目の体つきが違ったというのも、まったく同じ踊りをしても意味がないという事につながったのだと思う。六代目はこういったように芸の本質を教えられていた。

## (3) 女形の捉え方

歌右衛門は、特殊な女形であったといえると思う。青年劇以降は女形ばかりやっており、立役をやったのは一度だけであった。歌右衛門は、子供の頃は男の役ばかりであった。子供の頃から綺麗な役をしたいと思っていたため、日々の舞台をつとめるうちに青年劇以降女形に専念するようになった。普通口上の席では、どのような女形でも立役の姿で舞台上がる。口上には、襲名、追善、引退、初舞台などいろいろなケースがあり、簡単に言えば、お披露目の席が、口上の席である。しかし、歌右衛門は女形の姿で口上の席につらなった。女形は老婆や悪女といった役はやらない。普通はそういった役は立役がこなすのが一般的である。しかし、歌右衛門はこういった役をやった。

## 第3章 七代目梅幸

### (1) 生い立ち

1915年、生まれてすぐに尾上家の養子になった。幼少の頃ひ弱で医者にかかる事が多かった。「父はかねがね小柄でやせていた私の体つきから女形にしたてようとしていたらしい。」と七代目梅幸は回想している(七代目尾上梅幸『梅と菊』日本経済新聞 1979年 p.55)。女形への道はそのように決まった。菊の助を経て三十二歳で七代目梅光を襲名した。結婚は、お見合いでなく自分で見つけてきたとなっている。海外に演技指導に行ったり公演に行ったり、と精力的に活動している。1995年に亡くなる。

## (2) 芸について

「五代目さん(今井注：五代目菊五郎をさす)は、(今井注：五代目歌右衛門とは) 反対に、微に入り細にわたり教える方だったようです。」(河村藤雄『六代目 中村歌右衛門』 下巻 小学館 1986年 p.47)、「父の教え方は、祖父の六代目菊五郎と同じで口で教えればすぐ済むところを、『もう一回、もう一回』と繰り返し練習させるのである。」(七代目尾上梅幸『拍手は幕が下りてから』NTT出版 1989年 p.213)。この事を「その手はなんだ。目が木を見ているなら指も目線に合わせて木を指さなければおかしい。おまえのは、バラバラだ」という事を教えるのにも口では言わずもう一回もう一回とやらせたということを、七代目梅幸は回想している。

梅幸が言うには女形の基本は踊りである。歌舞伎というくらいなのだから舞は重要である。男尊女卑の考えが昔からありそれを脈々と受け継いでいる歌舞伎では、いくら大物の女形でも劇の上では立役より一歩引いて演じなくてはならない。最後は、女形のせりふで終わるという事はなく、立役の発言でおわるようになっている。女形は、日々稽古と違って日常生活においてもお茶・お花・針仕事・料理といったことを学んでいたようである。

## (3) 女形の捉え方

女形ばかりやっていた歌右衛門と異なり、梅幸は、女役だけではなく、立役もやっていた。「勸進帳」で源義経の役や他の役でも立役を演じている。そういった点では、普通の役者であるように思う。

## 第4章 二人の役者の違い

### (1) 共通点

七代目尾上梅幸、六代目中村歌右衛門は、似ているところもあるが違うところもある。ともに女形をメインとして、同じ時代に生き歌舞伎の危機にも直面し乗り越えてきた。

二人の共通点は、海外公演に参加しているという事である。二人とも精力的に取り組んでいた。

### (2) 相違点

女形として異例であったのは、間違いなく歌右衛門であろう。歌舞伎の舞台では、女形は一歩引くということが原則であり、立役をたてる必要がある。そういった意味で、女形は立役に追従することになる。これは舞台のみならず、歌舞伎の世界でも影響があり、立役のほうが上にたつ傾向がある。ここで歌右衛門は女形であるにも関わらず、歌舞伎の危機に直面したときに歌舞伎をよくするために自分の地位を高めようとしたと思う。具体的には、政府から賞をもらったり、歌舞伎界における重要な要職についたりする事であった。立役でなかった歌右衛門にとっては、外部の評価によって歌舞伎界での地位を上げざるを得なかった。梅幸には特別そういったことはなかった。

女形という点にだけ絞ると、歌右衛門が普通ではなかったという事はわかると思う。伝統文化の歌舞伎においては、常軌を逸していたように思える。だからこそ、歌右衛門には華があったと思う。

## 第5章 女形の心情

以下に示すように、女形とはつらい事の多い役である。役者である以上、稽古はたいへんであり、これは立役・女形ともに変わりはない。しかし女の役を演じるという点で女形の方がたいへんであると思う。女形であるため私生活においても女性が行うしぐさや立ち振る舞いを盗み、習得しなければいけない。正坐から両下腿（膝から下）を外に出した割坐といった座り方を歌舞伎でするかは分からないが、医学生の見地からすると、これは女性にしかできないといってもよい。というのも骨盤が女性と男性では異なるので同じような動きができない。こういったことから女性と男性では骨格が異なるため同じ動作をする事が難しいときがあると分かる。それにもかかわらず、男性が女性の役をするとなると苦勞する事は目に見えているように思う。また、二人とも言っているのだが女形はストレスがたまる。「女形がたまに立ち役をすると、『生き延びる』という実感がある。亡くなられた時蔵（今井注：歌舞伎役者）さんも、よく『ああ、立役をすると楽だね』といっておられたが、体を殺さない分、楽なのであろう。」（七代目尾上梅幸『拍手は幕が下りてから』NTT出版 1989年 p.49）というように、女役は、身体的にたいへんであることが、容易に理解できる。他の女形ではお酒を飲む事で気を紛らわす人がいるくらいストレスのかかる事である。素人の考えでは、それならいつその事辞めてしまえばいいではないかと思う。しかしそれは違うのであろう。まず、伝統芸能である歌舞伎において何にも増して女形とは必要なものとなっていると思う。テレビや映画で時代物がやられているご時勢において、歌舞伎が他の伝統芸能と差別が図れる唯一の点が女形であるように思える。確かに舞台も魅力であると思うが、それは他の劇でも再現可能なものであると思う。やはり女形が核になるように思う。そんな中であるからこそ、女形は自分たちに自信を持ち、肉体的にもつらい女形を続けていけるように思える。この事は著者の勝手な推測ではなく、梅幸が以下のように言っている。「女形を自分のものにするのは大変だが、逆に言うと、女形に歌舞伎の真髓があるように思う。（中略）男性が女を演ずるところに、役作りの難しさとおもしろさがあるように思う。」（七代目尾上梅幸『拍手は幕が下りてから』NTT出版 1989年 p.49）。この事から女形に対する自負が感じられる。女形ゆえの苦悩もあるだろうが、女形が必要であるという必要性によって、自分のアイデンティティの確立ができていくと思う。だから、女形は女形に誇りを持ち女形として歌舞伎の世界に生きていくのではないかと思う。

### おわりに

男の人が女性を演じるとき、演技手はどのような気持ちなのであろうかということが、調べ始めるきっかけになった。以上述べてきたようにやはり大変ではあるがやりがいがあり、誇りに思えると分かった。歌右衛門にしる梅幸にしる女形に対して積極的に取り組んでおり、その事は海外への公演に行っていた事からもわかると思う。

### 参考文献

- 今尾哲也『歌舞伎の歴史』（岩波新書、2000年）
- 河村藤雄『六代目 中村歌右衛門』（小学館、1986年）
- 七代目尾上梅幸『梅と菊』（日本経済新聞、1979年）
- 七代目尾上梅幸『拍手は幕が下りてから』（NTT出版、1989年）



### 【コメント】

今井君は歌舞伎の女形に注目した。どのような気持ちで男性が女性の役を演じているのであろうか。この疑問が今井君の出発点である。

同時代の著名な女形である六代目歌右衛門と七代目梅幸の比較を試みたのはとても優れたアイデアであった。両者の比較をとおして女形役者の共通性と多様性の一端が浮かびあがった。

少し注文をつけるとすれば、論文のなかに肖像写真を入れてほしかった。写真があれば、二人の違いがさらに印象深く読者に伝わるのではなかろうか。二人の女形役者の違いは、芸風のみならず、体つき、顔つきなどの風貌にも顕著にあらわれていると思うからである。

多忙な授業や実習に追われまとまった時間が取りにくかったためだろう、文献資料の収集範囲がやや狭かった。歌舞伎専門雑誌などをみれば、もっと面白いエピソードを拾うことができたであろう。

今井君が「歌舞伎通」の医師として活躍されることを期待します。 (兼重 努)

# 動物園

B - 2 0 関 千寿花

# 目次

序論

第一章 動物園の現状

- (1) 日本の動物園の成立
- (2) 動物園関連の法律

第二章 動物園の役割

- (1) 自然保護・種の保存
- (2) 教育的要素
- (3) 動物研究

第三章 動物園の存在意義

- (1) 動物園廃止論者の意見から考える
- (2) まとめ

最後に

謝辞

参考文献

## 序論

私がこのテーマを思いついたのは、動物園が好きであったからに他ならない。大学 1 回生の短い間に動物園に 4 回行った。神戸にある王子動物園、東京の上野動物園、大阪にある天王寺動物園、そして京都市立動物園。動物園という存在に疑問を感じ始めたのは、天王寺動物園と一緒にいった友人が「動物って嫌いじゃないけど、動物園の動物ってみんな精神病みたいだから来るのやなんだよね」と言ったことからである。

動物が動物園で野生本来の姿で暮らしていないことはわかる。トラやライオンが檻の中で行ったり来たりしているのは、本当に精神病のようにはか感じられない。しかし、動物を精神病にして楽しんでいるわけではない、動物に窮屈な生活をさせて楽しんでいるわけでもないと思いたかった。何故、動物園が存在するのであろう。動物園の存在意義とは何なのか。ただ動物園が好きだからといって、私はこのまま何の疑問も抱かずに、今後何度も動物園に足を運んでいいのであろうか、そんな気持ちが今回テーマを設定するに至った。

## 第一章 動物園の現状

動物園は人生で 4 回は行く。最初はこどもの時、親に手を連れられて。2 度目はカップルで、そして自分が親になった時。最後は年老いた時、散歩がてら動物に癒されに行く。…という話は聞いたことがあるだろうか？ 普段は娯楽としての役割しか気付かないように思うが、動物園とは本当はどのような存在なのであろうか。

動物園 どうぶつえん zoo || zoological garden

動物園とは動物を収集飼育し一般に公開している施設であるが、日本では現在、博物館の一種とされる社会教育施設である。したがって博物館法で規定される趣旨に沿って運営されている。すなわち資料（生きた動物）を収集し保管し（飼育管理）、展示して教育的配慮のもとに一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーションなどに資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関連する調査研究を目的としている。同じ趣旨で国際博物館会議（ICOM）も動物園を博物館の一つのタイプと認めている。これは今日の姿であるが、動物園の歴史は必ずしも平たんなものではなく、いくつかの段階があったことを示している。（平凡社、百科辞典より引用）

### （1）日本の動物園の成立

初めて日本人が動物園を見たのは 1862 年（文久 2 年）の遣欧使節である。当時の日記が様々な人によって書かれているが、その日記の中には<動物園>という言葉は見つけれず、野獣園、などといった表記のされ方であった（動物園という概念が存在していないので、各々表している言葉は様々であった）。初めて<動物園>という言葉が出てくるのは、随行した福沢諭吉が 1866 年に出版した『西洋事情』である。この後すぐに<動物園>という言葉が大衆に広まったわけではないが、動物園を日本で実現しようとする人の中では定着されつつあった。

この書物で福沢が紹介したのは、議会制・税制・郵便などの諸制度を始め、蒸気機関・電信・新聞などの利器、痴児院（精薄児施設）・老院・啞院・盲院などである。それらと並んで<博物館>が紹介され、その一つの施設として初めて<動物園>という言葉が出てく

る。近代文明を取り入れるために行われた遣欧使節であるが、動物園もその一環として受け止められたようである。そのため、日本における動物園は博物館を構成する一部として創設する方針であった。日本における動物園設立に関しての構想は三つ描かれていた。一つは福沢諭吉が紹介した自然史博物館の構想で、この中に動物園の創設が含まれている。これは、現在の大英博物館のようなもので、当時の日本にはまだ自然史博物館に興味を持ち、意義を見出す人は少なかったようである。そのため、自然史博物館は実現されなかった。二つ目は文化財博物館としての構想で、現在の東京国立博物館のよって象徴されるような博物館のようなものである。その中に動物園のようなものの創設が含まれている。動物を文化財として捉えていた面は、博覧会などにも動物（生き物）が展示されていたことを考えると理解できる。三つ目は日本に資本主義を樹立するために役立つと考えられていた、産業博物館あるいは技術博物館の構想である。遣欧使節の目的がそうであったように、最終的にはこの構想が強まり実現することになる。

## （２）動物園関連の法律

以下は戦後に日本で施行された動物関係の主な法律である。太字は特に重要なものだが、これらは動物に関する法律であって、動物園の指揮・運用の規程まで定めてはいない。動物園は成立過程から考えても博物館様施設なので、博物館法という法律によって動物園という施設運用は定められている。しかし、いわゆる博物館やレジャー施設と異なった存在であるはずの動物園も一緒に規定しているので、結局動物園は曖昧な位置付けなようである。

- 1973 年「動物の保護及び管理に関する法律」制定
- 1975 年「犬及びねこの飼養及び保管に関する基準」（総理府告示）
- 1976 年「**展示動物の飼養及び保管に関する基準**」（総理府告示）
- 1980 年「**実験動物の飼養及び保管等に関する基準**」（総理府告示）
- 1987 年「**産業動物の飼養及び保管に関する基準**」（総理府告示）
- 1999 年「動物の愛護及び管理に関する法律」に改正（2001 年より環境省所轄）
- 2000 年「動物取扱業者に係る飼養施設の構造及び動物の管理の方法等に関する基準」（政令）
- 2000 年「人の生命、身体又は財産に害を加えるおそれがある動物の指定」（政令）
- 2002 年「**家庭動物の飼養及び保管に関する基準**」
- 2004 年「**展示動物の飼養及び保管に関する基準**」改正  
以下、実験動物、産業動物も改正へ
- 2005 年「動物の愛護及び管理に関する法律」改正へ

世界の動物園については詳しく調べていないが、動物園法という動物園独自の法律を定めている国もある。しかし、日本には動物園法がないので、動物園という名称を使用する際の制限もない。今回の研究で対象にしたのは、法律で「展示動物」と称されている動物のほとんどが生活している「動物園」についてである。北海道の熊牧場も動物園に入るかもしれないが、どういう趣旨で熊を飼育しているのかを理解しない限り、どういった「動物」に入るのか決められないので、どの法律で規定されるべき「動物」かも決められない。よって今私があえて「動物園」とは法的にどのようなものかを定義して研究を進める必要

はないと感じる。法的に中途半端な存在である「動物園」が、人々にどの様に受け入れられているのか、どんな役割を期待されているのかを考えるのが今回の目的である。

現在、動物園関連の法律は主に環境省の管轄である。しかし、これらの法律は規定の大枠しか設定していないため、各都道府県の裁量の余地が大きくなっている。動物園の園長になるのは各都道府県の教職員になる必要があり、動物を飼育する際に適当とするケージの大きさなども各都道府県によって異なる。動物園に対する環境エンリッチメントの評価など、世論によって条例を変えてきた都道府県もあり、日本の動物園を一様に考えるには無理がある。このように、動物園という言葉で動物園の役割を満たしていなくても使用できること、環境エンリッチメントの基準が都道府県によって異なることなどから、一概に日本の動物園を評価するのは難しい。そのため、動物園を法的にではなく、社会に必要な存在としての位置付けを理解して行きたいと考えている。

「動物園を見ればその国の文化程度がわかる」ともいわれるように、動物園はヒトの暮らしの中で最も文化的な象徴であるとも考えられる。今回は、日本の動物園を調べるに留まったが、世界の動物園を考えると、期待されている役割、法的な基準などは様々である。社会から求められている動物園の役割が定まってから、法的な基準を定めた国が多いので、日本はまだ動物園の役割が流動的なために法律を定めるには至っていないのかもしれないと考える。世界の流れから、日本の動物園のエンリッチメントなどが問題になっているが、日本は日本なりの動物園の役割を見出せばよい。日本の文化と日本人的な考えがエンリッチメントにも、一般に世界で言われている動物園の役割にもマッチしていけばよい。そう考えると、世界に対して日本の動物園が十分に独自の意見を表明できることを願って、日本に動物園法が作られてほしい。

動物園は生活に余裕のある国にしか存在しないと思っているのは偏見だったようである。動物園を調べていくうちに、動物園は単なるレジャー施設ではないのだという意識を世界中の人々が持っていることに気付いた。動物園よりも経営の簡単なレジャー施設は相当あると思う。それでも国が動物園を作りたがる理由は、博物館的な要素を兼ね備えているからであり、それでも人々が動物園に行きたがる理由は、ヒトと動物とのかかわりから始まって宗教観・倫理感に行き着く様々な文化的な背景が存在するからなのであろう。先にも書いたが、その国なりの動物園の存在意義があるのは当たり前のことであり、内容によっては他の国が口出しをしてはいけないことを含んでいるのかもしれないと感じる。日本の動物園を考える上では、日本で生まれて生きてきた私の偏見がおそらく入っているであろう。しかし、その側面があることで、動物園が日本に存在する意義が見出せるような気がする。日本に動物園が誕生して発展してきた。さらに日本の動物園の発展を願うとき、日本の歴史と日本人の価値観が深く関わってくるのではないだろうか。この文を読み進めて、それを知っていただけたら幸いである。

## 第二章 動物園の役割

動物園に求められている役割は成立当初から現代にいたるまで普遍的なものではないであろう。しかし、日本では動物園が博物館の一部という構成のもとに成立したので、教育的要素、動物研究という趣旨が最初から存在していたように思う。動物園の存在意義が議論され始めた 1980 年代では社会に求められている役割は、レクリエーション、教育的要素、自然保護（種の保存）、動物研究の 4 つであった。しかし最近では、1980 年に国連機関である IUCN（世界自然保護連合）が「世界環境保全戦略」の中で「動物園や水族館は、種の保存、遺伝子の多様性の保存、また環境学習の面で貢献できる」と述べたことにより、動物園の目的は教育的要素と自然保護（種の保存）がメインであると意識されるようになった。世界的な背景に沿うように、日本では動物園の役割が求められているのであろうか。また、日本の動物園はその役割を担おうとしているのであろうか。

### （1）教育的要素

教育的要素では看板や展示の方法が主な表現である。まずは展示の方法について紹介する。展示方法は、「生態的展示」が最近の主流になってきている。これは、動物の本来の姿をいかに展示しようか、という考えから生まれた展示方法であり、野生動物の本来の生息地における環境と生活を作り出すことが目的である。つまり、サンプルとしての「種」ではなく、自然環境とのつながりを持った「個体」として展示する方法である。自然環境や野生動物に関して何を伝えたいか（教育したいか）といったら個体と環境のかかわりであった、つまりエンリッチメントを重視した展示方法を取らざるを得なかったということなのである。環境エンリッチメントとは、展示動物がより快適に暮らせるように配慮した施設のことであり、動物愛護で動物の権利が侵害されていると言われるのは環境エンリッチメントの低さである。教育的要素を突き詰めた結果、動物本来の姿を説明し理解してもらうために、動物 1 個体のための展示を行う必然性に迫られたとも言えよう。

さて、もう一つは看板に関して。看板は動物の属名や生息地が一般に表示されているが、それだけではない。動物をよりよく知ってもらうために、メイティングシーズンはいつですとか、だからこの季節のオスは凶暴なので注意しましょうとか、細かいけど記憶に留まるような方法を取った多くの看板がある。今年の夏にラオスの動物園を見る機会を得た。ラオスの動物園について、一番驚いた看板について言及しようと思う。まず、普通なら（日本では）属名や生息地まで書いてある看板が“TURTOL”とだけ書かれていたことである。そのときはこれが教育的要素を担っているのかと思ったが、今思い返せばそれがラオスなりの教育なのかも知れないと思うのである。まだまだ高校まで通える人が少なく、識字率も都市部では高いが少し離れると激減すると聞く。外国人向けのお土産ショップにいる英語ぺらぺらの店員さんが、14\$ の買い物をして 20\$ 出したときのおつりの計算を、電卓を使ってやっていた。日本ではいくらバカが増えていると言っても、義務教育中にそれくらいはできるようになるだろう。そう、だから動物園の教育もラオスの教育事情と十分マッチしたものなのかも知れないと思えてきたのだ。動物園に展示されていたって、鹿は「シカ」と説明された。アルビノではない白い種類のサルをアルビノと展示しており、本当に教育か？とも思ったのだが、始めて日本以外の動物園を見る機会であったので、そして少しはラオスの生活を理解し始めた時期だったので、これほど深く動物園に関して考えられたことが嬉しかった。普段看板はあまり気にしない存在である。しかし、動物の外

見でわかる「カメ」以外に情報がないとは、なんてつまらないものなのかと感じた。私たちは無意識に教育という名の情報を求めに動物園に行っている事実もあると気付いた。

さらに、教育的要素は観客と動物のふれあいなしでは図れないものであるようだ。日本は文化的にも親切であり、危険な動物との接触はほとんどと言っていいほど回避されている。触れあえるといっても、昔日常的に触れ合っていた畜産動物の類だけである。しかし、ラオスの動物園は観客と動物との交流が十分に図られていた。例えば、シカにきゅうりをあげられたり、ゾウに乗れたりする。そしてほとんどがあみ柵を隔てて動物と観客が直に直面する。手を出せば間違いなく噛み付かれる位置。危険は自分で回避しなさいというのならアメリカに近いが、単に飼育係や動物園の経営者にそこまでの知識がないのかとも感じられる。それはともかく、シカの三角筋か僧帽筋かの首の筋力は私の両手でも勝てないくらい強いなとわかったし、ゾウの体毛はジーンズを通すぐらいしっかりしていて痛いなということも実感できた。こんな実体験、どうやって忘れよう？他にどうやって得られるものだろう？動物と直にふれあえることがこれほど教育に必要と感じたこともなかった。

このように、教育的な要素は無意識に観客が求めているものであり、日本の動物園もそれに答えるべく、展示方法の改善を行ったり情報を充実させたりしている。動物の環境エンリッチメントを考えた展示は強いては動物への正しい理解につながり、動物とのふれあいはおそらく動物との共存の小さな理想像なのかもしれない。これらのことを通して私は、動物園の教育的要素は非常に大きいと理解した。

## (2) 自然保護・種の保存

ワシントン条約(絶滅の危機に瀕した野生動植物の国際取引に関する条約)では、今飼っている動物が死んだ時、次の動物を野生から持ってくることは禁止されている。他にも様々な野性動物の保護を目的とした条約がある。このようなことから、種の保存と言うのは、動物園の存続にとって重要な位置を占めている。

動物園での種の保存はおそらく、絶滅危惧種を増やして野生に放すなどといった行為を指すのではないと考える。動物園の動物保護活動は環境保護区やサファリパークなどと比較すると、あまり求められていないのではないかと思うからである。動物園と環境保護区、サファリパークはまた違ったものではないかという思いがあるのだが、どのような規程が敷かれているのかは定かではない。動物園で、啓蒙ではなく実際に自然保護をしようというのは、やはり動物園の敷地が狭い日本には導入できない考え方ではないだろうか。しかし、日本では全国の動物園にいる各動物の親子関係を必ず把握している(戸籍のようなもの)。なぜなら、狭い動物園内の個体間では近親相姦の生じる恐れがあるからだ。世界ではパンダなど動物園の個体数が限られている動物に限り行われているが、日本以外では絶滅危惧種や動物園での繁殖が期待されている動物に関してしか行われていない。それは、展示している動物が野生で傷ついていたといったような保護を必要としている動物を飼育しているという現状もあるようなのだが、このような戸籍制度は繁殖を考えると非常に有効なのではないだろうか。これらの話は、日本が世界の流れをふまえながら、日本なりに動物園の役割を考え出そうとしている現れであると考えられる。動物園は身近なところであるにも関わらず、動物園について考えることはあまりない。これも日本人の傾向なのかも知れないが、是非今後、日本なりに動物園の役割が議論され始めてほしい。

動物園生まれ、動物園育ちが増えてきた時代だが、本当に動物本来の行動を身に付けているのであろうか。動物園のゴリラが、勢力争いをしなくて済むためメスに乱暴にあたっ



ていたのだが、もう一匹のオスを群れに入れたとたん、急にメスに親切になった、という多摩動物園のエピソードをどう感じるだろうか。種の保存と言っても、動物園という限られた個体数の中では、本来の動物が兼ね備えている気質や生活を発揮していないと思える。DNA だけ続いたからといって種の保存とは言えないから、動物の種を動物園で守り続けようと意気込まなくてもいいと思わずにはいられない。根本的な問題はやはり、教育をして実際の野性動物の生活環境がこれ以上犯されないように守っていけばいいのではないだろうか。動物園が展示できる動物はこれ以上野生から連れてくることはできない。そのためにサンプルとして種を保存しようとするのは確かに必要である。しかし、動物園の動物と野生の動物はやはり違うのではないかと感じる。

### (3) 動物研究

私は以前自分の研究志望の動機・今後の見通しを想像したことがある。それは、以下のような感想になった。

私の好きなアーティストの歌に次のような歌詞がある。

夢、夢って あたかもそれが素晴らしい物のように

あたかもそれが輝かしい物のように 僕らはただ賛美してきたけれど

実際のところどうなんだろう？

何十万人もの命を一瞬で奪い去った核爆弾や細菌兵器

あれだって最初は 名もない化学者の純粋で小さな夢からはじまっているんじゃないだろうか

そして今また僕らは 僕らだけの幸福の為に

科学を武器に 生物の命までをもコントロールしようとしている

(Mr.Children : Everything is made from a dream より)

私の夢は研究者になることである。脳や神経について研究がしたい。それは、人体という小宇宙を司る脳や神経がどのような機構であるのかをただ知りたいからである。ただ、今のところは、単なる興味から解明したいだけであり、社会にどう応用していくかにはほとんど関心がない。それと同時に、どう社会に応用されていくかわからない不安がある。解明したい興味と負の方向への応用に対する不安が私にとりついて離れない。

大学は元来研究する施設である。教育という概念が誕生したのは研究成果が悪用され始めたからであろう。歴史とともに科学が進歩し、古い例を出すならば、最初は騎馬隊だった戦いが鉄砲による戦いになる。その発展は良い方向への進歩といえるのだろうか。戦いに死はつきものだが、鉄砲を用いることでより多くの死者が出る。それは核爆弾が発明されたときも同じで、科学の進歩に犠牲がつくことがしばしばあった。人がいる以上必ず興味があり、科学が進歩するのは避けられないが、応用の仕方が問題なのであろう。その問題を解決するために教育という概念が誕生したのではないだろうか。

教育は技術だけを専門性だけを学ばよいわけではない。研究者か否かに拘らず何か解明され、その事実が自分の職や専門にかかわるときに、それをどう応用していくかはその人次第である。そのとき誤った選択をしないよう、大学で正しい価値基準を身につける、これこそが教育の真の目的ではないだろうか。特に専門性の高い医学部という環境には、同じ考えや視点を持つ人が多いから、専門以外の勉強は本当に大切だと思う。

最近医の倫理を問われることが多くなった。医学はまさに生物の命までをもコントロールしようとしているからである。医学の進歩が難病の治療につながるから良いと単純に考えるわけにはいかないだろう。病気がすべて治る時代になったら、病気や障害を差別する偏見が同時に生まれる。だからとい

って医学は進歩するし、進歩によって負の方向にも正の方向にも社会への応用は広がる。常に答えのない選択肢をつきつけられて考え続けながら、それでも流れる方向に進んで歴史は動いてきたけれど、その中で生きていた人がひとりひとりよい行動をとれば流れは少しでもよい方向に行くのではないか。そのために、やはり幅広い視点が必要で、答えが出なくても一生その問題を考え続けられる人間性を養うために学ぶことは必要である。すべての分野に知的好奇心を持つのは難しいと思うが、自分が選んだ専門をよりよく発揮するために、社会が負の方向へ進むのを止める小さな力となるために、勉学も課外活動も精一杯励まなければならないと思う。

私は研究者になりたいが不安もある。本当に興味だけで行ってよいのだろうか。例えば寿命の機構が完全に解明されたら、人はみな生き続けるのだろうか。死ぬことなく生き続け、そこに本当に人生の楽しみを見出せるのだろうか。期限があればこそ与えられた期間が素晴らしく思える。そういうものだと思えてならない。

研究の対象になること、それが社会で応用されることは最初の好奇心からでは想像がつかないほど奥が深いものである。研究者の知識欲は正当化されなければ発展・持続してはいけないと思うのだが、それで知識欲が抑制できるかと言うとそうでもない。動物園も然り、ヒトにある動物への好奇心を満たせる場としてはやはり「動物園」しかないのではないかと思う。博物館もヒトの知識欲の集大成のようなものである。博物館としての動物園をもっとアピールしても良いのではないのだろうか。おそらくその機能は教育的要素に含まれているのかも知れないが、やはり私は、教育的要素と研究機関を統合させた人間の心理が動物園の存在には深く関与しているのではないかと考える。

### 第三章 動物園の存在意義

今回参考にさせていただいた動物園に関与する団体を紹介する。

- ・ **日本動物園水族館協会**：1939年に当時19の園館によってつくられる。1965年には動物園55水族館33に達し同年11月22日付けで、文部省社会教育局（現在の生涯学習局）所管の社団法人として発足し、現在では動物園94水族館61が加盟している。協会に加盟するためには、4つの社会的使命（第二章参照）を果たしているかどうか厳しく審査され、尚かつ、加盟園館はこの基準を遵守し続けなければならない。
- ・ **市民 zoo ネットワーク**：2001年4月に設立したNPO(2004年4月からNPO法人)。目的は動物園を通じて人間と動物の関係を見直す機会を提供し、人間と動物を取り巻く環境に対する意識を高めること。
- ・ **ALIVE (All Life In a Viable Environment (地球生物会議))**：野生動物、ペット、実験動物、動物園、畜産動物、生命操作などに対して活動している。目的は少しでも動物たちの犠牲を減らし無くしていくこと。全国動物園調査などを行い、動物園の改善もしくは廃止を呼びかけている。また、実験動物に関しても動物実験の禁止を主張している。

動物園の話では、「動物」という「生き物」を対象にするので、動物保護の話は宗教論に行き着いたり、環境保護と重なり合ったり、人間と動物のかかわりに着眼し始めたりと、様々な方向へ展開していく。宗教論にまで行き着いた、肉食主義者に動物を束縛するのは良くないと言われても、議論の空間が違って思うように思う。こんな中で、動物園だけに絞り話をするのは非常に困難であるが、動物園の動物が、動物園の果たすべき役割に必要な存在かどうか、それに関して妥当な扱いを受けているのかについて考えていく。

#### (1) 動物園廃止論者の意見から考える

動物園廃止はイコール動物の不当な拘束をやめるべきだということであった。「動物園が社会に求められている役割を果たそうとすれば、動物を拘束するのはヒトの勝手であり、どんな良い環境を動物園で展開しようとしても、野生状態から隔離されている限り、拘束でしかありえない。」これは動物園廃止論者の理由をまとめたものである。「動物園の目的は動物園でなくても（動物がいなくても）果たせる」とまで言い切っているところもあった。例えば、教育的要素は、現在発達しているTVの方がよっぽど適しているだろうという意見もあるようだ。サバンナなどの自然のままの状態に入り込んで情報を提供できるのだからという理由であった。TVに関しては情報操作という問題点もあり、一概に信じられない媒介のように感じるが、動物園で実際に生きている動物を見たとしたら、百聞は一見にしかずだと思わないだろうか？また、TVの見過ぎで現実と空想の区別がつかないこどもが増加しているようだが、そんな媒介を使って自然教育をしたところでどんな効果が得られるのであろうか？自分の世界とは関係ない箱の中の出来事になってしまうのではないかと思うのである。

さて、動物を拘束することの正当な理由なんて存在しないと思う。しかし、よく耳にする「(ヒトと動物をフェアに見て) 知性ある動物を拘束するのは良くない」といわれると少々癪に障る。何故かという、その視点はヒトと動物を本当のところフェアに見ていないからである。動物は他の動物を拘束などはしないであろうが、ヒトが他の動物を拘束する行為は、動物とヒトでは明らかに違う「好奇心」または「知識欲」という名のもとでの行為だと思ふからである。動物の権利を主張するのなら、同様に動物としてのヒトの権利を主

張しなくてはいけないのではないだろうか?ヒトらしさと言われる、「知識欲」をヒトから取り上げていいのだろうか。ヒトの権利を抑圧して、動物の権利に躍起になることは矛盾した行為である。ヒトは動物を苦しめようとして拘束しているのではないはずである。知識欲から、たんに動物を身近に置いて観察し学びたかったのではないかと感じる。

## (2) まとめ

動物園は博物館の延長である。動物を知りたい、生きている動物でしかわからない何かを知りたい、という思いから動物を飼育し始めたのであろう。ヒトの知識欲、それは自然史博物館のようにヒトを取り巻くすべてのものに対して向けられている。ヒトは同じ仲間をも拘束して虐待することがある。同じ種なのに殺し合い、憎みあうことがある。しかし、動物園で誼譚したり、いがみあったりしているヒトはいない。それは、動物園という拘束する場を作りながらも、無意識にそこにいる動物を思いやり、エンリッチメントに気を配ろうとしているからである。そして、動物園を訪れたヒトは、ヒトと動物は同じ仲間であることに気付くのである。動物園で、ヒトを含めた「動物」を目の当たりにし、ヒトの振り見て我が振りを思い返すのである。動物を拘束していること、それよりもひどいことを同じ種に対して行ってきた歴史などが、ふと頭をよぎり、内省するのかもしれない。物理的な動物とヒトとの関係ではなく、動物園は生態系の一部、動物とヒトとの関係、自然とヒトとの関係を浮き彫りにしていると考えられる。

動物園で動物と向き合って、動物園の正当性を考えたり動物としてのヒトを考えたりする。その行為自体に意味がある気がする。感情論でしかない部分があるが、動物というヒトの知識の対象になった捕われの動物たち、だけどヒトは彼らを単なる捕われの「動物」としてではなく動物国の大使として（増井光子さんのことばより）扱うのだ。動物園とはその、動物を知りたい、動物界のヒトを知りたい、生態系の一部としてのヒトの存在を知りたい、という思いが集積した場なのではないかと思うのである。ヒトも動物の一種である。それにも関わらず、動物を檻に閉じ込める。ヒトなりの交流方法なのかもしれない。動物としてのヒトを、地球上にはヒトだけじゃないことを、動物園というモデルの生態系の中で確認したかったとも思える。科学技術に埋没して忘れかけている動物としてのヒトらしさを取り戻させてくれる場であるように感じる。

文明が発展してきて、ヒト自身も拘束されたことがたくさんある。遺伝子診断で知りたくもない情報を知ることができ、自分で選択しなければならぬ問題が山のように生じた。でもそれは、知識欲と社会への応用力でヒトにそれほどな不自由は感じさせずに来たと思う。動物がどんな思いをもっているのかわからないが、動物園に拘束されたからと言って即不自由につながるわけでもないように思う。動物園の存在が、ヒト社会の発展もつながり、いろんな生物と共存するこの一つの地球が良い方向に発展していく支えとなる。そんな思いを、動物園を通して願ってみてもいいのではないかと思うのである。私はヒトとして生きて行きたい。思い上がることなく、でも本来のヒトらしさを出して生きて行きたい。社会が動物園に何を求めているのかわからない。しかし少なくとも、動物を見てヒトが抱く感情は動物園の重要な役割であると思う。

## 最後に

動物園というテーマは思ったより難しいものであった。何故かという、動物園が存在する正当な理由を考えだすと、動物と人とのかかわり、宗教的な価値観、広くは環境保護の話にまで発展するからだ。私がそんなに大きな問題まで考えるに至ったのは、動物が好きだから、今後実験動物と深く関わっていくであろうという意識から、そうぞんざいに扱えないという想いがどこかにあったのだろうと思う。

今回の研究で明確にしたかったことは、動物園が存在するに当たっての正論である。動物園は近年、動物保護団体や環境保護団体から、猛反対を受けている。しかし、動物園が存在し続けた理由は、惰性なんかではないであろう。その意味を調べ切り、自分の中で決着をつけたかった。残念ながら、一般教養の一コマという限られた時間の中で、理解しきることは精力的にも物理的にも不可能であったため、中途半端な仕上がりになってしまった。しかし、この問題は今後も考え続けていこうと思う。文系の論文は明確な答えのないままに仕上げることを余儀なくされるもののようで、中途半端な結論としてまとめざるを得なかった私には煮え切らない感情があるが、これから医学系研究者になる私には非常に有意義な勉強であった。

## 謝辞

締め切りを遥かに過ぎていても、原稿の完成を温かく見守ってくださった平先生に感謝します。また、私の原稿を心待ちにし、叱咤激励してくださった早島先生、ご迷惑をおかけしました。

また、生物の教師という立場から、動物園について相談に乗ってくださった高校時代の恩師に大変感謝します。まとめきれない論文を意地でも仕上げようかという気にさせてくれたのは、彼と先に論文を書き上げた某友人のおかげだと思います。本当にありがとうございます。

## 参考文献

- 佐々木時雄著 『動物園の歴史（日本における動物園の成立）』（1987年）  
東京都 - 東京都恩賜上野動物園編集 『上野動物園百年史』（1982年3月20日）  
渡辺守雄 著部分 『動物園というメディア』（青弓社 2000年第一版）  
マーク・ベコフ 藤原英司、辺見栄(訳)『動物の命は人間より軽いのか（世界最先端の動物保護思想）』（中央公論新社 2005年7月10日）  
市民 ZOO ネットワーク 『いま動物園がおもしろい』（岩波ブックレット No.623 2004年5月7日）  
増井光子著 『動物が好きだから』（どうぶつ社 2003年11月30日）  
ALIVE 『動物園を問う』（ALIVE 資料集 No.3 1994年9月5日）  
梅崎義人著 『動物保護運動の虚像』（成山堂書店 2004年4月8日）  
<http://homepage3.nifty.com/zooedu/kanshinbunnya.htm>

### 【コメント】

2005年の夏に、評判の旭山動物園に行く機会を得た。関さんが、「日本の動物園も…展示方法の改善を行ったり情報を充実させたりしている」と述べている動物園の代表例だ。旭山へ行ったのはただの偶然だが、どうしても人間科学研究のことを思い出してしまう。動物園好きの関さんは、論争の的になっている動物園の存在意義や倫理の問題については悩み抜いた末明確な結論を出しかねておられたが、旭山を訪れたとしたらどのような感想を抱かれるであろうか。私はというと、旭山動物園の盛況を見ていると人が自然を理解するにはこのような装置が必要だ—動物園がなければ個々に飼育されている動物種の大半を知ることなく過ごすことになったであろうし、名前や映像ぐらいは知るにしても存在を体感することはできなかったであろう—ということを素朴に実感してしまっていた。少しは動物を閉じこめていることの痛みを感じるかなと思っていたが、シロクマのダイビングの前にそんな予想は吹き飛んでいて、怖いけど爽快というのは側にいた小学生たちと同じ思いであったろう。高度情報社会のなかで実感的に生きていくことを「動物化する」というのだが、動物園はヒトを動物化させてくれる空間であるかもしれない。

(平 英美)

## 編集後記

今年度の『人間科学研究』には7名の受講生から論文が提出されました。ここまで漕ぎ着けるにはそれぞれに大変な努力と忍耐を要したことと思います。「人間科学研究」という科目は、人文・社会科学の分野に関することであれば、受講生が何を調べようと自由であるというスタンスを取っています。今回も実に多様なジャンルに関して論文が寄せられましたが、「想定範囲内」と言うべきでしょう。これを出発点に更に研究を深められそうな素材も幾つかあります。この経験が、受講生の皆さんの「人間の幅」を広げる一助となることを祈る次第です。

(辻 正博)

今年もまたたいへん変化に富んだテーマをそれぞれの方が選ばれました。「平和」の価値が今ほど問われる時代はないように思いますが、人間は大昔から実は「平和」とは何かを模索してきたことを再認識しました。あるいは推理小説の中に秘められた作家の思いや経験を知る事は新鮮でした。また、二種類のなじみのなかった文字に出くわす事もできました。ひとつは現代の世相を映す携帯文字、もう一つは歴史的に解明されていない謎の文字群で、どちらも言語の根底にあるコミュニケーションの原則に挑戦するかのように「限られたグループ」に向かっているものでした。エレクトリック・ギターの誕生の次第も初めて知りました。「女形」に関しては世界に目を広げるとまだまだ発見があることでしょう。そして現代は動物と人間の関係はこれまでになく緊密で、それ故に緊張した関係にもなり始めています。

クラスは論文提出をもって終わりましたが、知的好奇心の種は蒔かれたばかりだと感じています。願わくばこれが大きくそだちますように。

(相浦玲子)

できるだけ労力をかけずに手軽に単位をいただく。こうした安易なやり方が通用しないのが「人間科学研究」である。そのためか学生諸君から敬遠される傾向にある。

毎年受講生の数が気になる。今年は7名で、昨年4名からほぼ倍増した。受講者数の低落傾向からひとまず脱却できたことを素直によろこびたい。

受講生諸君は二回生の時点で「論文」を書くという経験をされた。卒業論文が課せられない医学科の学生さんにとって、文献収集、分析、論の構成、文章化といった一連の作業を経験されたことは大きな意義があると思う。この経験は近い将来必ず生きてくる。

最後にひとこと。来年度から早島先生にかわって、私（兼重）が「人間科学研究」の世界話を任されることになりました。早島、平、相浦、辻先生、そして副学長馬場先生、ご指導賜りますよう、よろしく願い申し上げます。

(兼重 努)

例年のように少数精鋭であったのは残念ではありますが、一人あたりの発表機会は増えるので授業としての成果は上がっていると思っています。とはいえ、学生主導にするためにも次年度からは参加することにメリットがあることをもう少し訴えかけていかねばと反省しています。

(平 英美)

本年度もこの小冊子が無事刊行できたことに、世話人としてほっとしています。特に今回はこの講義を選択した7名全員が脱落することなく最終原稿提出まで取り組んでくれました。課題調査・発表を繰り返す中で、教員からのアドバイスはもとより、学生諸君が相互に批評しあい、また励ましあって、お互いに支えあいながら原稿完成・提出までこぎつけてくれました。何よりの経験であったと思います。

なお、次年度からこの講義の世話人が兼重努先生に交替します。フレッシュな世話人のもと、この論集がますます魅力あるものになることを念じています。兼重先生、よろしくお願いします。

(早島 理)



—— 編 集 ——

相浦玲子・兼重 努・平 英美・辻 正博・早島 理

人 間 科 学 研 究  
報 告 論 集  
第 5 号

2006年 3月

発行者 滋賀医科大学  
〒520 2192 大津市瀬田月輪町  
〔連絡先〕基礎医学事務室 (TEL 077 548 2061)  
印刷所 宮川印刷株式会社